
日本地球化学会ニュース

No .162

2000 .8 .8

主な記事

●学会記事

- 2000年度日本地球化学会年会の最終案内及びプログラム
- 訃報：浜口 博 名誉会員
- 「鳥居基金」助成実施報告
- 評議員会，各委員会，研連議事録

●その他の研究助成，学会，シンポジウム等の各種情報のお知らせ

- 猿橋賞，沖縄賞，笹川科学研究助成，シンポジウム，講演会，人事公募など
- 書評（「レオロジーと地球科学」）

●編集後記

現在，日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village で公開しております。URL アドレスは，
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html>
です（Yahoo! JAPAN にも登録しております）。
ご覧の上，ご意見，ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で，より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

2000年度第47回日本地球化学会年会

・地球化学会年会講演申し込みの皆様

講演受付に際してデータの一部が消去されてしまいました。皆様のご協力で修復を行ってまいりましたが間違いが皆無とは言い切れないのが実状です。特に口頭発表とポスター発表の間違い、講演題目の間違いが心配されます。また、電子メールで講演申し込みを行った方々の中に講演受付を行えていないものもあるようです。プログラムをご覧になって間違いがありましたら、至急、下記までお知らせ下さい。できる限りのご便宜をおはかりいたします。特に、ポスターセッションに学会当日でも掲示できるよう余裕を持たせておきます。ご利用下さい。この場をお借りいたしまして、講演申し込みを行っていただいた方々に深くお詫び申し上げます。

なお、新しい情報をホームページ(http://ksgeo.kj.yamagata-u.ac.jp/~kazsan/gsj2000/gsj2000_index.html)に順次、掲載いたします。ご覧いただけると幸いです。

〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12
山形大学理学部地球環境学科 柳澤文孝
Tel : 023 628 4648 (直通), Fax : 023 628 4661
E-mail : yanagi@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

後援・協力：財団法人山形コンベンションビューロー

会期：2000年9月25日(月)～9月27日(水)

会場：山形大学教養教育棟2号館(A・B・C・D会場、
大会本部、休息室、ビジネス展示)および大学
会館3階大集会室(ポスターセッション)
(山形県山形市小白川町1 4 12)

発表：

・一般講演

発表時間は質疑応答を含めて15分です。

・ポスターセッション

大学会館3階大集会室で行います。ポスターパネルの大きさは横120cm、縦180cmです。

第2日目のポスターは9月26日(火)午前9時から掲示して下さい。午後1時より午後2時までをポスターセッションのコアタイムとします。なお、ポスターは

2時30分までに撤去して下さい。

第3日目のポスターは9月27日(水)午前9時から掲示して下さい。12時より午後1時までをポスターセッションのコアタイムとします。なお、ポスターは1時30分までに撤去して下さい。

・課題講演

発表時間は質疑応答を含めて20分です。なお、課題講演(4)のみ質疑応答を含めて25分です。

課題(1) 海洋と地球 海洋化学と地球環境研究の今後(その2)

課題(2) 風送ダストの地球化学

課題(3) 日本列島における初期人類文化の年代とその背景解明への理化学的アプローチ

課題(4) 21世紀に渡す地球化学の課題

夜間小集会

日時：9月25日(月) 午後6時～午後8時

場所：会場については当日掲示いたします。

主催：日本地球化学会将来計画委員会

話題：「地球化学・宇宙化学の発展を目指して」(話題提供と情報交換、討論)

1. Goldschmidt Conference 日本開催へ向けて(松久幸敬)

2. 科研費細目「地球化学」の審査をめぐって(野津憲治)

3. 地球化学関連の研究機関の統廃合の行方(未定)

連絡先：野津憲治 notsu@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

総会：9月26日(火)午後2時30分から午後4時までC会場で開催いたします。

学会賞授賞式並びに受賞講演会：9月26日(火)午後4時から5時30分までC会場で開催いたします。

懇親会：

日時：9月26日(火) 午後6時より

場所：ホテルオーヌマ(山形大学より徒歩5分)

参加費：予約 5,000円、学生 3,000円、予約外 6,000円

参加申込方法：(予約正会員、要旨集予約、懇親会予約)

締切：9月1日(金)(必着)

参加費：(予約会員 1,000円、学生会員 無料、非会員 2,000円、予約外会員 2,000円)

要旨集：予約 4,000円（送料込），予約外 5,000円
懇親会：予約 5,000円，学生 3,000円，予約外 6,000円

1) ホームページ上からの受付

ホームページ（<http://tour.tokyu.com/chikyukagaku/>）の所定の書式に従って送信して下さい。

2) 電子メールによる受付

下記の電子メールアドレスまで講演申込の書式をご請求下さい。電子メールで書式をお送りいたします。必要事項を全て記入のうえ下記のメールアドレスまで送信してください。なお、誤送信等の責任は負いかねますので送信には充分にご留意下さい。

E-mail: Yamagata2@tokyu-tour.co.jp

3) 郵送による受付

ホームページあるいは電子メールでお申し込みできない場合は、ニュース添付の要旨込み用紙またはそのコピーをご利用下さい。封筒には講演申込所在中と朱書して下さい。なお、遅延、輸送中の紛失等の責任は負いかねますので、送付方法には充分にご留意下さい。

〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12
山形大学理学部地球環境学科 柳澤文孝

送金

参加費、要旨集代、懇親会費は9月1日(金)までに下記宛にご送金下さい。領収書等は東急観光(株)山形支店よりお送りいたします。

銀行口座：山形銀行山形駅前支店

普通口座 0799726

加入者名：東急観光(株)山形支店

宿泊の予約

東急観光(株)山形支店がお世話いたします。本号ニュースに添付の「2000年度日本地球化学会 宿泊ご案内」を参照のうえ、添付の申込書またはそのコピーを用いて9月1日(金)までに下記の東急観光(株)山形支店の相馬一または山口謙一までお申し込み下さい。

東急観光(株)山形支店 営業 相馬一または山口謙一

住所：〒990 0039 山形県山形市香澄町1 11 22

Tel：023 641 4141（代表），Fax：023 641 1019

年会連絡先

〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12

山形大学理学部地球環境学科 齋藤和男

Tel：023 628 4649（直通），Fax：023 628 4661

E-mail：kazsan@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

または

〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12

山形大学理学部地球環境学科 柳澤文孝

Tel：023 628 4648（直通），Fax：023 628 4661

E-mail：yanagi@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

講演申込・参加申込の電子メールアドレス

Yamagata2@tokyu-tour.co.jp

講演申込・参加申込のホームページアドレス

<http://tour.tokyu.com/chikyukagaku/>

日本地球化学会公開講演会

開催地：山形市中央公民館（アズ七日町）大会議室

開催日：平成12年10月29日(日)

講師：山形大学理学部教授 齋藤和男

演題：あなたも放射能を浴びている

講師：山形大学理学部助教授 伴雅雄

演題：火山の噴火 蔵王は大丈夫ですか

内容：近年の科学技術の発展と産業経済の拡大の結果、人間活動は大規模化して地球環境に加速度的な変貌をもたらし、人間の生活に大きな影響を与えるようになってきている。しかし、地球環境問題について総合的な理解のための情報が十分に提供されているとは言い難いのが現状である。本講演会では地球環境問題の現状と今後について平易にお話する。

連絡先：

〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12

山形大学理学部地球環境学科 齋藤和男

Tel：023 628 4649（直通），Fax：023 628 4661

E-mail：kazsan@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

または

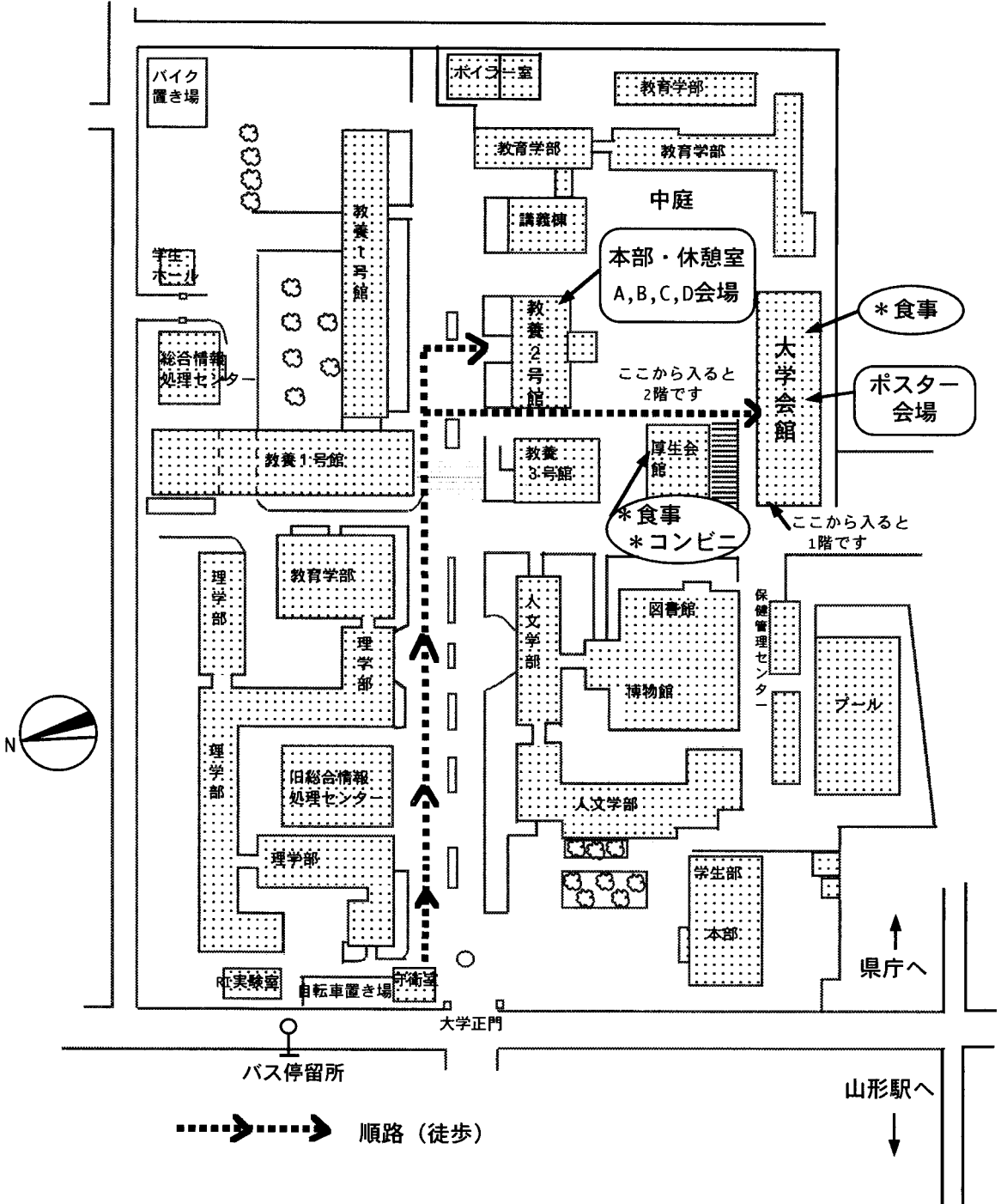
〒990 8560 山形県山形市小白川町1 4 12

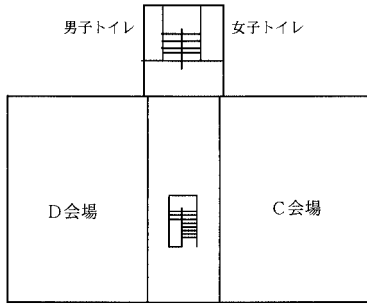
山形大学理学部地球環境学科 柳澤文孝

Tel：023 628 4648（直通），Fax：023 628 4661

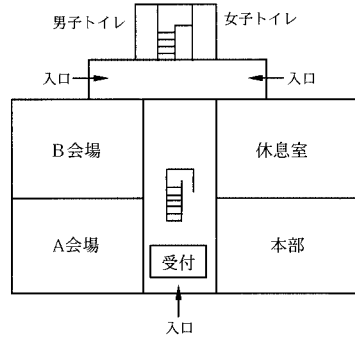
E-mail：yanagi@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

山大小白川キャンパス案内





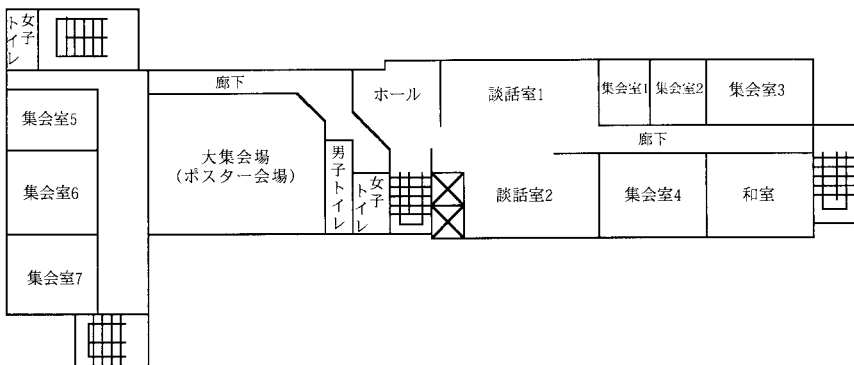
<2階>



<1階>

教養2号館

正門



<大学会館 3階>

日付	会場	午前	昼食	午後	夜間
9月 25日 (月)	A会場	受付	温泉 熱水	有機物	..
	B会場		岩石・地殻	岩石・地殻	..
	C会場		火山	課題講演 (2)	..
	D会場		鉱床	海洋	..
	ロビー	展示物搬入	展示会
	会場未定
9月 26日 (火)	A会場	環境問題
	B会場	陸水
	C会場	課題講演 (4)	..	総会	授賞式・受賞講演
	D会場
	ロビー	展示会
	ポスター会場	ポスター展示	コアタイム
ホテルオーヌマ	懇親会
9月 27日 (水)	A会場	地球外物質	..	地球外物質	..
	B会場	大気・降水	..	大気・降水	..
	C会場	課題講演 (1)	..	堆積物	..
	D会場	課題講演 (3)	..	課題講演 (3)	..
	ロビー	展示会		展示物撤去	..
	ポスター会場	ポスター展示	コアタイム

- 課題講演 (1) 海洋と地球 - 海洋化学と地球環境研究の今後 (その2)
 課題講演 (2) 風送タストの地球化学
 課題講演 (3) 日本列島における初期人類文化の年代とその背景解明への理化学的アプローチ
 課題講演 (4) 21世紀に渡す地球化学の課題

2000年度日本地球化学会年会プログラム

⁶サウザンプトン大) 知念正和¹・大森保²・高田實彌³・李受映⁴・藤岡換太郎⁵・D. Green⁶

第1日目(9月25日)

【A会場】

一般講演(温泉)

(9:30~10:45) 座長:佐竹 洋

- 1A01 長島観測井で観測された温泉ガス組成の地震地球化学的变化: H₂/Ar 比のスパイク状およびランブ関数状変化とその解釈(¹名大院・²東大院理附属地殻化学実験施設・³名大院人間情報学研究所・⁴名大院理附属地震火山観測研究センター) 森康則¹・伊藤貴盛²・山下瑠佳²・永峰康一郎³・川邊岩夫¹・大井田徹⁴・藤井直之⁴
- 1A02 地殻歪観測用掘削井における地下ガスの組成変動(¹名大院理地球惑星・²東大院理地殻化学・³名大理地震火山観測地域センター) 山下瑠佳¹・伊藤貴盛²・川邊岩夫¹・山内常生³
- 1A03 硫酸溶液と岩石の反応における酸性変質過程(鹿児島大理) 藤田俊一・坂元隼雄・富安卓滋・穴澤活郎
- 1A04 香草原泉の成分変動と草津白根山の火山活動(上智大理工) 木川田喜一・小金井桂・大井隆夫
- 1A05 北陸地方のグリーンタフ地域における温泉ガスの組成と同位体比(¹東工大火山流体研究センター・²富大理・³東大理) 大和田道子¹・佐竹洋²・長尾敬介³

一般講演(熱水)

(10:45~12:00) 座長: 渋谷靖弘

- 1A06 秋田県澄川地域における地すべり前後の地熱活動の比較(¹秋田県衛生科学研究所・²秋田大工資) 武藤倫子¹・松葉谷治²
- 1A07 熱水溶液の修正 Rackett 式(兵庫教育大自然) 渋谷靖弘
- 1A08 地熱水中のヒ素及びアンチモと前濃縮法(鹿大理) 坂元隼雄・須佐康代・富安卓滋・穴澤活郎
- 1A09 秋田県銭川地すべり地内の2種類の酸性熱水と岩石の反応(秋田大工資) 松葉谷治・小林勝人・川原谷浩
- 1A10 大西洋中央海嶺, Rainbow site における海底熱水活動の地球化学的研究(¹琉球大理工・²琉球大理・³京大原子炉・⁴広大理・⁵JAMSTEC・

一般講演(有機物)

(13:00~14:15) 座長: 村江達士

- 1A11 粘土触媒を用いたホルモース反応とその化学進化的考察(筑波大化学) 山下敦士・三田肇・下山晃
- 1A12 粘土存在下での尿素を用いたオリゴマー生成とその化学進化的考察(筑波大化学) 寺崎正紀・下山晃
- 1A13 新庄新第三系堆積岩におけるカルバゾール類の深度分布とその考察(筑波大化学) 仁平雅子・三田肇・下山晃
- 1A14 新庄新第三系堆積岩に存在するフェノール類の検出と考察(筑波大化学) 堀久仁子・三田肇・下山晃
- 1A15 新庄新第三系堆積岩中のシクロアルカン異性体比と続成変化との関係(筑波大化学) 藪田ひかる・下山晃

一般講演(有機物)

(14:15~15:45) 座長: 猪狩俊一郎

- 1A16 川流布 K/T 境界堆積岩中のマレイン酸およびマレイミドの特徴(筑波大化学) 小園正樹・下山晃
- 1A17 川流布 K/T 境界堆積岩中におけるヒドロキシ酸の検出(筑波大化学) 山村香織・三田肇・下山晃
- 1A18 川流布 K/T 境界堆積岩中のチオフェン類の分布とその酸化還元条件による濃度変化(筑波大化学) 勝又英之・下山晃
- 1A19 フィトールの加熱実験で生成する分岐炭化水素と堆積岩中に存在する分岐炭化水素との比較(筑波大化学) 緒方いずみ・三田肇・下山晃
- 1A20 秋吉石灰岩中の有機物組成から見たその堆積環境(¹名大院理地球惑星・²九大院理地球惑星) 木村理恵¹・三村耕一¹・井川敏恵²
- 1A21 北西太平洋海洋堆積物中のノルマルパラフィンのCPI値変化に対する考察(¹名大院理地球惑星・²地調) 倉田有里子¹・山本綱志¹・三村耕一¹・西村昭²

一般講演(有機物)

(15:45~17:15) 座長:三村耕一

- 1A22 初期代謝解明を目的としたモデル細胞膜中のアミノ酸透過の温度・pH依存性の検討(九大院理) 河野徹士・村江達士
- 1A23 サーモプラズマ属古細菌の全脂質の組成に対する培養時の炭酸ガス濃度の影響(九大院理)○高松雄一郎・北島富美雄・村江達士
- 1A24 好熱好酸性古細菌および好塩性古細菌の脂質イソプレノイドの生合成とリジン代謝(九大院理) 遠藤賢志・山内敬明・村江達士
- 1A25 リグニンの模擬腐植化過程における褐色腐朽菌 *Laetiporus sulphureus* の役割(九大院理) 藤加珠子・北島富美雄・村江達士
- 1A26 尾瀬ヶ原から採集されたモウセンゴケの窒素および炭素同位体比(東京農工大院農) 大澤紘一郎
- 1A27 リグニンフェノールと炭素・窒素同位体比による汽水湖(厚岸湖・網走湖)における有機物の輸送と堆積過程の検討(北大院地球環境) 中島陽司・南川雅男

【B会場】

一般講演(岩石・地殻)

(9:30~10:45) 座長:福岡孝昭

- 1B01 中国西部亜大陸マントル中の白金族元素存在度(都立大院理・²上海原子核研究所) 李曉林^{1,2}・海老原充²
- 1B02 放射線照射下における岩石風化と希土類元素存在度パターン(名大院理) 柴田信之介・田中剛
- 1B03 本邦先新生代石灰岩の希土類元素存在度パターン(名大院理) 川邊岩夫・田中万也
- 1B04 カルサイト 水溶液間における希土類元素の分配実験(名大院理) 田中万也・川邊岩夫
- 1B05 Rb-Sr 同位体系による美濃帯鵜沼地域黒色頁岩の放射年代及びその起源(名大院理地球惑星) 高間智宏・浅原良浩・田中剛

一般講演(岩石・地殻)

(10:45~12:00) 座長:柳 哮

- 1B06 九州北部に産するマントルペリドタイト捕獲岩の白金族元素含有量とOs同位体組成(名大院理地球惑星) 仙田量子・田中剛

- 1B07 レーザーアブレーション誘導結合プラズマ分析装置を用いたジルコン結晶の微量成分およびU-Pb年代の迅速分析(¹東大地震研・²東工大・³東大理) 折橋裕二¹・平田岳史²・谷健一郎³

- 1B08 MC-ICPMSによる火山岩試料のトリウム同位体比の測定(東大地震研) 福田聡・中井俊一

- 1B09 高圧鉱物に含まれる流体の塩濃度と残留圧力の同時決定の試み(東大院理地殻化学) 鍵裕之

- 1B10 チャートの地球化学的特徴の地質学的意義(¹広大院理・²核燃料サイクル開発機構・³国立科博・⁴名大院理) 清水洋¹・國丸貴紀²・米田成一³・足立守⁴

一般講演(岩石・地殻)

(13:00~14:30) 座長:蟹沢聡史

- 1B11 前弧域におけるヨウ素の再循環について:ヨウ素129を用いた鹹水の年代測定の結果から(¹放医研・²Rochester大) 村松康行¹・吉田聡¹・U. Fehn²

- 1B12 岩石中のCe(ϵ)YCe(ϵ)比の定量 Ce異常との比較から得られる地球化学的知見(¹広大院理・²東大院理・³核燃料サイクル開発機構・⁴地調・⁵高工研PF) 高橋嘉夫¹・清水洋¹・鍵裕之²・吉田英一³・白井朗⁴・野村昌治⁵

- 1B13 CeとFeの存在状態からみたチャートの堆積・続成過程に関する研究(¹広大院理・²広大RI・³高工研PF) 長塩絵理¹・高橋嘉夫¹・清水洋¹・中島寛²・野村昌治³

- 1B14 日本海溝堆積物と岩手火山玄武岩中のホウ素含有量の比較:沈み込んだ堆積物起源の流体相の量の見積もり(¹立正大地球・²富士常葉大環境防災・³秋田大工学資源) 福岡孝昭¹・佐野貴司²・長谷中利昭³・島岡晶子¹

- 1B15 塩化コバルト結晶水和物における水素同位体分別(学習院大理) 垣内正久・山崎誠

- 1B16 火成活動と下部地殻の更新(九大理) 柳哮・一色弘充・前田俊一

- 1B17 炭酸カルシウム中に取り込まれる微量希土類元素のX線吸収微細構造(XAFS)(¹東京農工大院連合農・²東大院理地殻化学・³東京農工大農・⁴広大院理・⁵高エネルギー加速器研) 津野宏¹・鍵裕之²・赤木右³・高橋嘉夫⁴・野村昌治⁵

一般講演(岩石・地殻)

(14:30~16:30) 座長:村松康行

- 1B18 Concomitant occurrence of primordial and recycled noble gases in the Earth's lithospheric mantle (阪大院理宇宙地球) 松本拓也・Yue-long Chen・松田准一
- 1B19 岩石流体反応における炭素・酸素の異なる動き (静岡大理・²新潟大院) 和田秀樹¹・M. Sarich-Kumar¹・鈴木将之²
- 1B20 四国東赤石山肉淵岩体の Os 同位体比と化学組成 (名大院理) 加地拓哉・田中剛
- 1B21 高温状態の島弧における,沈み込んだ堆積物の挙動 (京大院理地球熱学) 下田玄・巽好幸
- 1B22 屋内で成長した鍾乳石(ストロー)中の化学成分について(琉球大理学部・²琉球大機器分析センター) 小澤奈央¹・平良初男¹・棚原朗²
- 1B23 瀬戸内玄武岩,高マグネシウム安山岩のオスミウム同位体とスラブ溶融(京大院地熱研) 鈴木勝彦・巽好幸
- 1B24 シリコン結晶のSIMS精密同位体比分析(地調) 森下祐一・佐藤久夫・木多紀子・富樫茂子
- 1B25 メリライト中の陽イオンの拡散 端成分間の相互拡散(¹学習院大理・²東大RIセンター・³原研むつ) 長沢宏¹・森岡正名²・鈴木崇史^{1,3}

【C会場】

一般講演(火山)

(9:30~11:15) 座長:田中久雄

- 1C01 火山灰の化学的風化による元素の挙動と流動 反応モデルによる解釈(慶應大理工) 鹿園直建・瀧野昌嗣
- 1C02 南九州北薩地域の火山岩類の地球化学的研究 (¹秋田大工学資源・²福岡大理・³ルーマニア地調・⁴青森県環境科学技術研) 浅川敬公¹・北逸郎¹・山元正継¹・田口幸洋²・Seghedi, I.³・長谷川英尚⁴
- 1C03 ロイヒ・キラウエア火山の希ガス同位体比とその地球科学的意味(東大地震研) 兼岡一郎・山本順司・三浦弥生
- 1C04 CO₂の拡散放出からみた硫黄島(東京都)の火山活動に関する研究(¹防衛大地球科・²東大理地殻化学) 杉山公敏¹・細江守一¹・上村暁寛¹・野津憲治²・Pedoro, A. Hernandez²・下池

洋一²

- 1C05 CO₂に富んだ低温の火山ガスについて(東工大火山流体研究センター) 大場武・平林順一・野上健治
- 1C06 北西九州に産する新生代アルカリ玄武岩の希ガス同位体組成(東大院理地殻化学) 角野浩史・長尾敬介・野津憲治
- 1C07 カメルーンのエオス湖・マヌーン湖における湖水溶存希ガスの同位体組成(¹東大地殻化学・²岡大固体地球研究センター・³米国地調・⁴カメルーン鉱物地質研・⁵米国ミシガン大) 長尾敬介¹・日下部実²・William Evans³・Gregory Tanyileke⁴・Festus T. Aka⁴・George Kling⁵

課題講演(2)(風送ダストの地球化学)

(13:00~17:00)

コンピーナー:金井 豊・上岡 晃・柳澤文孝

- 1C08 「Mineral Aerosol Climatology 風送ダスト」(気象研)三上正男
- 1C09 中国の乾燥・半乾燥地域に分布する風成堆積物の地球化学的特徴(¹理研・²広大院理・³山大院理) 本多将俊¹・矢吹貞代¹・清水洋²・金山晋司^{1,3}
- 1C10 ストロンチウムは,風送ダストのトレーサーとなりうるか? 風送ダスト発生域におけるストロンチウム同位体組成について (¹理研・²山大院理工学・³熊大院自然科学) 矢吹貞代¹・本多将俊¹・金山晋司^{1,2}・常青³
- 1C11 日本国内で採取されたエアロゾルの Sr 同位体比測定例 大陸起源砂漠物質の寄与(¹山大院理・²理研) 金山晋司^{1,2}・矢吹貞代²・柳沢文孝¹・本多将俊²
- 1C12 エアロゾルと砂漠砂に含まれる硫酸イオンの硫黄同位体比(¹山大理・²鶴岡工専・³三菱マテリアル総研) 本山玲美¹・柳澤文孝¹・小谷卓²・川端明子³・上田晃³
- 1C13 土壌中の細粒石英の酸素同位体比と砂漠起源風成塵 東アジアの例(地調) 松久幸敬
- 1C14 中国砂漠土・黄土のリーチング実験と地球化学的特徴:日本の土壌への寄与についての考察(¹筑波大地球科・²国立環境研・³中日友好環境保護センター) 横尾頼子¹・中野孝教²・西川雅高²・全浩³

【D会場】

一般講演（鉱床）

（9：30～11：30） 座長：垣内正久

1D01 H_3^+ と2原子水素化合物間の水素同位体交換平衡における異常質量効果（東工大原子炉工学研）
小高正敬

1D02 熱水鉱床における熱水 岩石間の反応メカニズム（慶応大理工応用化学） 高橋裕之・鹿園直建

1D03 マグマに対する硫黄溶解度：とくに珪酸塩ガラス組成と硫黄含有量に関する（¹東北大院理・²東北大大東アジア研究センター） 辻村知之¹・北風嵐²・後藤章夫²・谷口宏充²・秋月瑞彦¹

1D04 レニウム・オスmium法による黒鉱鉱床の研究（神戸大発達科学） 寺門靖高

1D05 菱刈浅熱水性金鉱床周辺の火山岩の Sr, Nd, Pb 同位体的特徴（¹筑波大地球・²金属鉱業事） 細野高啓¹・中野孝教¹・村上浩康²

1D24 芦別炭鉱と太平洋炭鉱の石炭中希土類元素の地球化学：起源植物の推定と元素移動の追跡（¹理研・²東京農工大農・³地調） 付鳳富¹・矢吹貞代¹・赤木右²・岩木正哉¹・鈴木裕一郎¹

1D25 水酸鉄()による金()イオンの捕捉および還元挙動（¹九大工・²九大理） 内田明子¹・横山拓史²・木村慶信²・渡邊公一郎¹・井澤英二¹

1D26 菱刈鉱床における熱水 岩石間の反応メカニズム 帯磁率と硫黄同位体比（¹慶応大理工・²学芸大教育・³東大理） 高橋裕之¹・鹿園直建¹・中田正隆²・今井亮³

一般講演（海洋）

（13：00～14：30） 座長：加藤喜久雄

1D06 閉鎖系におけるサンゴ礁生物の有機炭素および無機炭素の生産（東北大院理地） 奴賀義隆

1D07 サンゴ骨格形成時の Mg, Na, SO₄²⁻の類似挙動（¹名大大気水圏・²名工大） 三ツ口丈裕¹・内田哲男²・松本英二¹

1D08 フナフチ環礁の年代測定：海面変動にともなうサンゴ礁の形成（¹琉球大理・²名大大気水圏） 大出茂¹・増澤敏行²

1D09 海水中の銀の鉛直分布とその地球化学的支配要因に関する研究（東大海洋研） 張燕・天川裕史・野崎義行

1D10 Dissolved indium and rare earth elements in three Japanese rivers and Tokyo Bay: Evidence for anthropogenic Gd and In.（東大海洋研） 野崎義行・D. Lerche, D. S. Alibo

1D11 黄海・東シナ海表層堆積物中の脂肪族アルカン, アルカノールの安定炭素同位体組成（都立大院理） 鴨志田公洋・駒津美都紀・奈良岡浩・石渡良志

一般講演（海洋）

（14：30～15：45） 座長：野崎義行

1D12 定点 KNOT における海水中二酸化炭素濃度の時系列変化（¹資環研・²JST・³環境研・⁴北大） 鶴島修夫¹・今井圭理²・野尻幸宏³・渡辺修一⁴

1D13 海洋における Ba-Si/N ダイアグラムについて（¹東大海洋・²海科技センター・³資環研） 加藤義久¹・鎌田稔¹・斉藤千鶴²・渡辺豊³

1D14 北太平洋の炭酸系（北大院地球環境） 角皆静男・脇田昌英・渡辺修一

1D15 コプハマサンゴを用いた閉鎖系水槽内での生物生産量の変化（東北大院理） 阿蘇敏文

1D16 蛍光増白剤を指標とした陸起源物質の沿岸域への輸送過程の解明（東農工大農） 真名垣聡・高田秀重

一般講演（海洋）

（15：45～17：30） 座長：加藤義久

1D17 相模湾における沈降粒子無機元素輸送の季節変動（¹名大大気水圏・²北大低温研・³静大理・⁴京大原子炉実験所） 増澤敏行¹・李鉄¹・中塚武²・北里洋³・高田實彌⁴

1D18 北太平洋溶存 N₂O のアイソトポマー鉛直分布（¹東工大院総理工・²科学技術振興事業団・³北大院理・⁴資源環境技術総合研・⁵国環研） 三輪達也¹・豊田栄^{1,2}・角皆潤^{2,3}・吉田尚弘^{1,2}・鶴島修夫⁴・野尻幸宏^{2,5}

1D19 海洋における一酸化炭素の炭素及び酸素安定同位体組成（¹東工大院総理工・²北大院理・³科学技術振興事業団） 中川書子^{1,2}・角皆潤^{2,3}・蒲生俊敬²・蜂須洋輔¹・吉田尚弘^{1,3}

1D20 北部北太平洋における表層海水中の N₂O/Ar（北大院地球環境） 中山典子・渡邊修一・角皆静男（講演中止）

1D21 閉鎖系結晶生成実験から推定された炭酸カルシ

- ウム表面へのランタンの分配定数（¹東京農工大院連合農学・²東大院理地殻化学） 赤木右¹・津野宏¹・鍵裕之²
- 1D22 二酸化マンガンによる $C\alpha(\)$ の酸化的取り込み機構の解明と希土類元素分配係数に見られるテトラド効果の検討（¹東大海洋研・²名大院理） 太田充恒¹・川邊岩夫²
- 1D23 北西太平洋定点 KNOT における溶存メタンの時系列同位体鉛直分布（¹東工大院総理工・²北大院理・³科学技術振興事業団・⁴資源環境技術総合研・⁵国立環境研） 山崎光浩¹・角皆潤^{2,3}・吉田尚弘^{1,3}・鶴島修夫⁴・野尻幸宏^{3,5}

会場未定

（18：00～20：00） 夜間小集会

第2日目（9月26日）

【A会場】

一般講演（環境問題）

（9：00～10：30） 座長：北 逸郎

- 2A01 炭素循環モデルによる，新世代気候変動の検討（慶應大理工） 柏木洋彦・鹿園直建・田近英一
- 2A02 第三世代の NOAA・NDVI データを用いた植生による炭素固定量の年々変動（名大大気水圏研） 加藤喜久雄・陳忠明
- 2A03 植生による炭素固定量の年々変動と大気 CO_2 の濃度と ^{13}C の変動との関連（名大大気水圏研） 小牧香織・陳忠明・陳中笑・加藤喜久雄
- 2A04 ステロール類を指標とした熱帯アジア地域の尿尿汚染モニタリング（¹東農工大農・²マレーシアプトラ大環境科学科） 大野慶¹・高田秀重¹・多羅尾光徳¹・Mohamad Pauzi Zakaria²
- 2A05 下水汚染の Molecular marker アルキルベンゼンの東南アジア水域への応用（¹東京農工大農学・²マレーシアプトラ大環境科学科） 大野慶¹・堤史薫¹・山口友加¹・Mohamad Pauzi Zakaria²・高田秀重
- 2A06 窒素同位体比を考慮に入れた N_2O の地球化学的循環モデルの構築（¹三菱総研・²東工大院総合理工） 徂俣正夫¹・石川正道¹・吉田尚弘²

一般講演（環境問題）

（10：30～12：00） 座長：高田秀重

- 2A07 二重収束型 ICP-MS を用いた土壌・植物中の U・Pu の濃度と同位体比の測定（放医研） 吉田聡・村松康行
- 2A08 都市河川底質中の金属元素の化学状態に関する研究（¹東大院総合文化・²地調） 田中佑人¹・松尾基之¹・金井豊²
- 2A09 土砂流入による河川・海水系の化学的变化と生物への影響（琉球大理） 渡久山章・与那城麻里子・Said Vuai Ali
- 2A10 希土類元素組成からみた多摩川の物質収支（¹東京農工大院農・²東京農工大連合農・³理研） 藤枝仁¹・赤木右²・矢吹貞代³・小倉紀雄²・付鳳富³
- 2A11 ギリシャアテネの中性雨の地球化学的研究（¹秋田大工学資源・²アテネ大理） 北逸郎¹・佐藤孝行¹・加瀬嘉則¹・バナギオテイスミトロポーロス²
- 2A12 1960年代大気中核実験の影響を利用した地球炭素循環の探索（山大理） 関口博昭・櫻井敬久・澤木勇一・松本匡史・郡司修一

【B会場】

一般講演（陸水）

（9：00～10：00） 座長：松葉谷 治

- 2B01 新しい地下水総合連続観測システムの開発2 観測結果（東大院理地殻化学） 伊藤貴盛・角森史昭・五十嵐丈二・野津憲治
- 2B02 乗鞍火山頂上付近における水質形成機構 多変量解析法の応用（¹鹿児島大理・²東大新領域創成科学研） 〇穴澤活郎¹・大森博雄²・坂元隼雄¹
- 2B03 河北潟における軽質炭化水素の挙動について（富山大理） 清棲保弘・山本洋子
- 2B04 Fluorescence characterization of freshwater organic ligands for copper using immobilized metal ion affinity chromatography and excitation/emission matrix spectroscopy. (Ins. Hydrospheric Atmospheric Sciences in Nagoya University) Fengchang WU

一般講演（陸水）

（10：00～11：15） 座長：清棲保弘

- 2B05 沖縄島中部地域における陸水の化学組成に関する研究（琉球大理） 伊敷牧・渡久山章

- 2B06 東濃鉱山周辺の地下水中のヘリウム同位体比
(核燃料サイクル開発機構・東濃地科学センター) 森川徳敏・徐勝・岩月輝希
- 2B07 陽イオン交換と被圧地下水の水質進化について
大阪平野北東地域を事例として (筑波大地球科学) 山中勝
- 2B08 地下水腐植物質と Am() との錯形成に及ぼす pH の影響 (日本原子力研究所・²近畿大) 長尾誠也¹・中口譲²・小川弘道¹

【C会場】

課題講演(4) (21世紀に渡す地球化学の課題)

(8:45~12:00)

コンピーナー: 松久幸敬・野津憲治・齋藤和男

- 2C01 局所分析から探る太陽系の起源(地調) 木多紀子
- 2C02 (地球)化学者の目で見ると地球内部(東大院理地殻化学) 鍵裕之
- 2C03 メルト包有物分析に基づくマグマの脱ガスモデル 薩摩硫黄島火山を例として (地調) 齋藤元治
- 2C04 ペルム紀末と白亜紀末の生物大量絶滅に関する有機地球化学的研究(筑波大化学) 三田肇
- 2C05 地球大気化学研究のこれから(宇宙開発事業団地球観測データ解析研究センター) 白井知子
- 2C06 海洋における物理・生物研究の統合の要としての海洋化学(北大) 中塚武
- 2C07 地球温暖化ガスの分析化学と物質循環の理解(三菱総研) 石川正道

【ポスター会場】

(コアタイム 13:00~14:00) ポスターセッション

- 2P01 ICP 発光分光分析法による地質標準試料中硫黄の定量(地調) 岡井貴司・寺島滋・今井登
- 2P02 新しい地下水総合連続観測システムの開発(1) システムの概要 (東大院理地殻化学) 角森史昭・伊藤貴盛・五十嵐丈二・野津憲治
- 2P03 地殻化学実験施設の観測井の特性について 伊藤貴盛・角森史昭・五十嵐丈二(東大院理地殻化学)
- 2P04 土壌の酸中和能に対する植生変化の影響(東大院総合文化) 森島知恵・松尾基之
- 2P05 水とモンモリロナイト表面との間の希土類元素の分配 固液界面での存在状態との関係 (¹広

大院理・²原研) 多田あきさ¹・高橋嘉夫¹・木村貴海²・清水洋¹

- 2P06 北西部北太平洋表層堆積物中脂肪酸分子の個別放射性炭素年代決定 (¹海洋科学技術セ・²国立環境研・³北大低温研・⁴筑波大) 内田昌男^{1,2}・柴田康行¹・河村公隆³・熊本雄一郎¹・米田穰²・大串健一⁴・向井人史²・原田尚美¹・田中敦²・廣田正史²・日下部正志¹・森田昌敏²
- 2P07 土器の発生年代と古環境(名大年代セ) 中村俊夫・谷口康浩・辻誠一郎
- 2P08 宮城県鳴子温泉掘削口中の有機物に富んだ炭酸塩スケールとその意義(東北大院理) 野田雅一・掛川武
- 2P09 有馬高温含鉄強塩泉中の Eu の正の異常について 温泉水並びに湧出母岩の化学分析値からの考察 (¹兵庫県立衛生研・²甲南大理) 寺西清¹・辻治雄²・寺本匡志²・高田和亮²・茶山健二²・磯村公郎¹・矢野美穂¹
- 2P10 ハワイ諸島, ノースアーチ火山地域アルカリ玄武岩類の⁴⁰Ar/³⁹Ar年代および地球科学(地調・²モンタレー湾水族館研・³海洋科学技術センター) 宇都浩三¹・可児智美¹・D. A. Clague²・石塚治¹・仲二郎³
- 2P11 定期貨物船観測による北太平洋の海洋表層二酸化炭素フラックスと生物生産(国環研・²地球人間環境フォーラム・³カナダ海洋科学研究所・⁴米国海洋データセンター) 野尻幸宏¹・藤沼康実¹・J. Zeng²・C. S. Wong³・P. Murphy⁴
- 2P12 北西太平洋セジメントトラップ2地点におけるアルケノンの生産と沈降の季節変動(地調・²都立大・³関西総合環境センター) 山本正伸¹・奈良岡浩²・嶋本晶文³・福原達雄³・田中裕一郎¹・西村昭¹
- 2P13 放射性核種, 微化石, 残留磁化等による海底マンガンクラストの精密年代測定を試み(地調・²ニュージーランド地質核科学研・³日大・⁴奈良教育大・⁵山大) 白井朗¹・イアン・グラハム²・小林貴之³・西田史朗⁴・原田憲一⁵・牧野浩美⁵・上嶋正人¹・石塚治¹
- 2P14 サンゴ骨格中の Ca, Mg, Sr の同位体希釈分析(地調) 野原昌人・横田節哉・鈴木淳・川幡穂高
- 2P15 定点 KNOT における海水中メタン濃度の季節変動(¹資環研・²JST・³環境研・⁴東工大・⁵北

- 大) 鶴島修夫¹・今井圭理²・野尻幸宏³・吉田尚弘⁴・角皆潤⁵・渡辺修一⁵
- 2P16 中国海南島産サンゴ骨格中の Mg/Ca 比, Sr/Ca 比を用いた古海水温復元 (北大院地球環境) 山崎康介・島村道代・大場忠道・豊田和弘
- 2P17 現世海成生生物起源炭酸塩中に存在する硫黄の同位体的研究 (筑波大) 西村幸子・梶原良道 (講演中止)
- 2P18 溶液系でのヴァテライトの安定性とカルサイトへの転移に与える希土類元素の影響 (1東京農工大院連合農・2東大院理地殻化学・3東京農工大農環境資源) 津野宏¹・鍵裕之²・赤木右^{1,3}
- 2P19 炭灰に含まれる硫黄同位体比 (1山大理・2地調・3三菱マテリアル総研) 本山玲美¹・柳澤文孝¹・鈴木祐一郎²・小島武³・金井豊²・川端明子³・上田晃³
- 2P20 筑豊地方の炭坑湧水に含まれる Na₂SO₄の起源 (岩大農) 鎌田光仁・溝田智俊
- 2P21 広島, 長崎で採取した堆積物に記録されていた戦災の痕跡 (1近畿大理工・2大阪市立大理) 山崎秀夫¹・小川喜弘¹・合田四郎¹・吉川周作²
- 2P22 環境指標としてのオナジマイマイに関する基礎研究 (東大院総合文化) 八十島光子・高野穆一郎
- 2P23 岩石 (安山岩) と異なる酸性溶液との反応 (東邦大理) 吉池雄蔵・岡村忍
- 2P24 西オーストラリア, ピルバラブロックに産する変質した始生代火成岩の起源 (名大情報文化) 杉谷健一郎
- 2P25 岩石試料からの Hf の化学分離法の開発 (東大地震研) 立田理一郎・中井俊一
- 2P26 沖縄本島北部地域における岩石中のウラン比について (1琉球大理工・2琉球大機器分析センター) 嘉手納恒¹・棚原朗²・平良初男¹
- 2P27 炭酸カルシウムの TL 強度に及ぼす金属元素の影響について (1琉球大機器分析センター・2琉球大理) 棚原朗¹・新里みゆき²・平良初男²
- 2P28 洞窟内堆積物表面の過剰 Pb 210について その3 (1琉球大理・2琉球大機器分析センター) 荷川取誠¹・平良初男¹・棚原朗²
- 2P29 マルチトレーサー法による花崗岩間隙水中での微量元素の拡散に関する研究 (1広大院理・2理研) 江川智絵¹・高橋嘉夫¹・榎本秀一²・蛭沼利江子²・清水洋¹
- 2P30 日本の上部島弧地殻におけるアンチモンと砒素の濃度 (1地調・2名大) 富樫茂子¹・今井登¹・奥山康子¹・田中剛²
- 2P31 豊羽 Ag-Pb-Zn 鉱床南東域における熱水変質岩の硫黄同位体化学 (地調) 清水徹
- 2P32 ナウマン象臼歯化石の AMS ¹⁴C 年代 (1名大院理・2名大年代測定センター) 南雅代¹・中村俊夫²
- 2P33 東北中国の tholeiite, alkali basalt のオスミウム同位体: プレート内マグマ活動に関する示唆 (京大院地熱研) 鈴木勝彦・柴田知之・巽好幸
- 2P34 沈み込むスラブの脱水過程とオスミウムの挙動: 高温高压実験と島弧火山岩のオスミウム同位体組成 (京大院地熱研) 鈴木勝彦・相澤義高・巽好幸
- 2P35 Broken Hill (オーストラリア) 鉱床モリブデナイトの高精度, 高分解能レニウム-オスミウム年代 (1京大院地熱研・2オーストラリア地調) 鈴木勝彦¹・Roger, G. Skirrow²・巽好幸¹
- 2P36 JB 1a, JA 2, JP 1 のオスミウム濃度と同位体組成 (京大院地熱研) 鈴木勝彦・巽好幸
- 2P37 2000年有珠山噴火活動に伴う地下水位変化 (北海道地調) 柴田智郎・秋田藤夫
- 2P38 日本およびシベリア上空における二酸化炭素安定同位体比のトレンド (1国立環境研・2航空技研・3ロシア永久凍土研・4ロシア大気光学研) 高橋善幸¹・町田敏暢¹・遠嶋康徳¹・井上元¹・田丸卓²・矢澤健司²・N. Fedseev³・M. Panchenko⁴・M. Arshinov⁴
- 2P39 海洋表層における Be 7, Be 10 の分布 (日本大学文理学部) 永井尚生・小林貴之・多田亘
- 2P40 XAFS の多変量解析による地球化学試料の非破壊状態分析 (東大院総合) 久野章仁・松尾基之・高野穆一郎
- 2P41 火山灰風化土壌中の微量元素の挙動 (地調) 上岡晃・関陽児・月村勝宏・金井豊・金沢康夫・濱崎聡志・中嶋輝允
- 2P42 北極ポーラーサンライズ期のエアロゾル, 雪中の水溶性有機態炭素 (1北大低温科研・2Meteorological Service of Canada) 成川正広¹・河村公隆¹・S. -M. Li²・J. Bottenheim² (講演中止)
- 2P43 Stable carbon isotope ratios of fatty acids in

marine aerosols from Chichijima Island, western North Pacific: Implications for source and atmospheric transport. (Inst. Low Temperature Science, Hokkaido Univ.) Jiasong Fang, Kimitaka Kawamura, Kouhei Matsumoto

【C会場】

(14:30~16:00) 総会

【C会場】

(16:00~17:30) 授賞式・受賞講演

奨励賞 超微量の炭素同位体比測定による海底熱水・冷湧水存在気体に関する研究(北大院理) 角皆潤

学会賞 宇宙線生成核種を用いた地球外物質の宇宙線照射史の研究(Space Sciences Laboratory, Univ. California) 西泉邦彦

柴田賞 希ガス同位体比を用いた地球惑星科学の研究 小嶋稔

ホテルオーヌマ

(18:00~20:00) 懇親会

第3日目(9月27日)

【A会場】

一般講演(地球外物質)

(9:00~10:30) 座長:海老原充

3A01 塩素の同位体宇宙地球化学⁽¹⁾(神戸大自然科学) 中村昇・川嶋雅則・沼田雅彦・村田忠嗣

3A02 HED母天体の形成史(極地研) 三澤啓司・山口亮

3A03 神戸隕石の分化した希土類元素パターンについて⁽¹⁾神戸大自然科学⁽²⁾神戸大理⁽³⁾極地研⁽⁴⁾地球化学研 廣田佑介¹・中村昇^{1,2}・尾上浩²・三澤啓司³・山下勝行²・D. Wang⁴

3A04 始原的エイコンドライトのSm-Nd同位体系(神戸大自然科学⁽¹⁾・神戸大理) 貴田恵美¹・山田和弘¹・中村昇^{1,2}・コンドロシ・ガーボル¹

3A05 ユレイト隕石希ガスの分別⁽¹⁾九大院理⁽²⁾東大院理 高岡宣雄¹・中村智樹¹・岡崎隆司^{1,2}・長尾敬介²

3A06 隕石中有機物の化学的特徴によるCMコンドライトの多様性⁽¹⁾都立大理⁽²⁾地調⁽³⁾筑波大化

学) 奈良岡浩¹・古宮正利²・下山晃³

一般講演(地球外物質)

(10:30~12:00) 座長:松田准一

3A07 地球上へのET-He fluxの見積もり 小嶋稔

3A08 原始太陽系における消滅核種Cs 135の存在度の見積もり⁽¹⁾広大理⁽²⁾国立科学博物館) 太田洋平¹・日高洋¹・米田成一²

3A09 オープライト隕石の希ガス同位体組成⁽¹⁾東大地震研⁽²⁾東大理地殻化学) 三浦弥生¹・長尾敬介²・岡崎隆司²

3A10 マーチソン隕石(CM2)中のコンドリュールの形状と化学組成(名大院理) 近藤正史・田中剛

3A11 コンドリュール中の始原的希ガス⁽¹⁾東大院理⁽²⁾九大院理) 岡崎隆司¹・高岡宣雄²・中村智樹²・長尾敬介¹

3A12 炭素質コンドライト「狭山隕石」の希ガス同位体分析 地球外物質としての証拠⁽¹⁾東大院理地殻化学⁽²⁾国立科学博物館) 海老澤紀子¹・大澤崇人¹・岡崎隆司¹・長尾敬介¹・米田成一²

一般講演(地球外物質)

(13:00~14:30) 座長:中村昇

3A13 鉄隕石中におけるMn 53の生成率について⁽¹⁾都立大院理⁽²⁾日大文理) 瀬戸口美奈¹・大浦泰嗣¹・海老原充¹・永井尚生²・本田雅健^{1,2}

3A14 コンドライトへのRe-Os年代決定法の適用⁽¹⁾国立科学博物館⁽²⁾都立大院) 尾寄大真¹・米田成一¹・海老原充²

3A15 Cコンドライト中のCAIにおける,Bの同位体測定(東大理地球惑星) 酒造唯・杉浦直治

3A16 アエンデ隕石中のType-C CAIの酸素同位体の分布⁽¹⁾東工大理工⁽²⁾学習院大理) 伊藤元雄¹・長沢宏²・塚本尚義²

3A17 Allende隕石のCAIに見られるBa同位体比変動⁽¹⁾広島大理⁽²⁾国立科学博物館) 日高洋¹・米田成一²

3A18 CAIの合成実験(学習院大理) 巻出健太郎

一般講演(地球外物質)

(14:30~16:00) 座長:長尾敬介

3A19 南極隕石の¹⁴C落下年代測定⁽¹⁾名大院理⁽²⁾九大院理⁽³⁾名大年代測定センター) 南雅代¹・高

- 岡宣雄²・中村俊夫³
- 3A20 微量元素存在度から見たパラサイト隕石母天体の進化(¹都立大・²東大地震研) 箕輪はるか¹・大浦泰嗣¹・海老原充¹・本田雅健¹・三浦弥生²
- 3A21 High Precision Mg isotopic analysis using multicollector SIMS: Application to the chondrule Al-Mg system. (地調) 劉永忠・木多紀子・森下祐一・富樫茂子
- 3A22 月表土の形成過程に関する年代学的研究(広島大理) 渡辺真由子・日高洋
- 3A23 オスミウム分析のための新しい地球化学試料分解法の開発(東工大理地惑) 服部道成・平田岳史
- 3A24 Canyon Diablo 鉄隕石中の Graphite Nodule における窒素(阪大院理宇宙地球) 浅芽広一郎・橋爪光・松本拓也・松田准一・ゲロ・クラート
- 3A25 南極宇宙塵の赤外分光分析(東大地殻化学) 大澤崇人・鍵裕之・長尾敬介
- 3A26 「狭山隕石」日本に落下した新しい炭素質隕石(¹国立科博・²都立大院理・³理研・⁴岡山大固体地球研究センター・⁵東大大院理) 米田成一¹・海老原充²・大浦泰嗣²・岡田昭彦³・日下部実⁴・長尾敬介⁵・奈良岡浩²
- 3A27 神戸隕石の化学組成(¹都立大院理・²国立科博・³神戸大理) 大浦泰嗣¹・海老原充¹・米田成一²・中村昇³

【B会場】

- 一般講演(大気・降水)
(9:00~10:30) 座長:向井人史
- 3B01 酸素・水素同位体比から見る植物内の水収支(秋田大工学資源) 二木茂樹・松葉谷治・川原谷浩
- 3B02 横浜で観測された酸性雨(1991年8月~2000年3月)(横浜国大教育人間科学) 村山治太(講演中止)
- 3B03 石英中の不純物組成による大気浮遊粒子状物質及び降水中黄砂粒子の識別(¹山梨県環境科学研・²科学技術振興事業団) 京谷智裕^{1,2}・輿水達司¹
- 3B04 航空機によるCO₂とCOの連続測定の結果について(気象研) 松枝秀和・澤庸介・井上久

幸・牧野行雄

- 3B05 土壌気相中の二酸化炭素の濃度・炭素同位体比の通年観測(¹名大院理地球惑星・²名大大気水圏・³名大年代測定総合研究センター) 高橋浩¹・木平英一²・檜山哲哉²・中村俊夫³
- 3B06 環境試料中のアンモニア態および硝酸態窒素同位体比の簡易・迅速測定法(電力中研) 坂田昌弘

一般講演(大気・降水)

(10:30~12:00) 座長:松枝秀和

- 3B07 安定同位体組成から考察した都市大気中一酸化炭素の挙動と起源(¹東工大院総合理工・²北大院理・³科学技術振興事業団) 蜂須洋輔¹・角皆潤^{2,3}・中川書子^{1,3}・吉田尚弘^{1,3}
- 3B08 成層圏におけるN₂Oのアイソトポマーの時空間分布(¹東工大院総理工・²科学技術振興事業団・³東北大院理・⁴宇宙科学研究所) 占部太郎¹・豊田栄^{1,2}・吉田尚弘^{1,2}・中澤高清³・青木周司³・本田秀之⁴
- 3B09 東シベリアにおける降水の安定同位体比と水蒸気の起源(¹京都大生態学研究センター・²北大低温科学研) 杉本敦子¹・内藤太輔¹・石井吉之²
- 3B10 都市大気中PAHsの安定炭素同位体比 起源推定への応用(¹農工大農・²東京薬科大生命科学科・³都立大院理) 奥田知明¹・深沢博子¹・川野博美¹・熊田英峰²・高田秀重¹・奈良岡浩³
- 3B11 中国各地の大気中の硫黄と鉛同位体比の特徴(¹国環研・²中国科学院地球化学研究所) 向井人史¹・田中敦¹・藤井敏博¹・曾毅強²
- 3B12 島根及び東京における大気・降水中的水銀濃度(¹電力中研・²島根大総理工) 丸本幸治¹・坂田昌弘¹・吉村友宏²・奥村稔²
- 一般講演(大気・降水)
(13:00~14:30) 座長:角皆潤
- 3B13 南極氷床表面におけるNa⁺, Cl⁻, SO₄²⁻およびNO₃⁻の分布(¹山大理・²極地研・³北大低温研・⁴総合研究大学院大学) 鈴木利孝¹・古川晶雄²・松岡健一³・飯塚芳徳⁴・神山孝吉²・渡辺興亜²
- 3B14 鹿児島市大気中水銀化学種の季節変動(鹿児島大理) 富安卓滋・江口真之・穴澤活郎・坂元

隼雄

- 3B15 石垣島における降水の化学的特徴 (¹富山大理工・²八重山商工高等学校) 佐竹宏介¹・東田盛善²・佐竹洋¹
- 3B16 植物葉による微量有機化学物質 (PAHs) の取り込みと物質循環における役割 (¹株式会社東京久栄・²東京農工大農) 深沢博子¹・川野博美²・高田秀重²
- 3B17 立山における一冬の積雪の同位体比と化学組成 (富山大理) 佐竹洋・岩佐幸司・川田邦夫
- 3B18 名古屋市における温室効果気体の都市固有変動解析 (名大院工応用化学) ○伊藤彰記・山田史進・樋口卓也・千葉光一・原口紘き

一般講演 (大気・降水)

- (14:30~16:00) 座長:鈴木利孝
- 3B19 成層圏大気中二酸化炭素の¹⁴C濃度変動 (名大年代セ) 中村俊夫¹・丹生越子¹・中澤高清²・青木周二²・本田秀之³・町田敏暢⁴
- 3B20 大気中ヨウ化メチルの濃度変動と海洋からの放出機構 (¹国環研・²Atmospheric Environment Service) 横内陽子¹・野尻幸宏¹・藤沼康実¹・Leonard A. Barrie²・Desiree Toom-Sauntry²
- 3B21 N₂Oの紫外光分解におけるアイソトポマー分別の波長依存性 (¹東工大総理工・²東工大理・³科学技術振興事業団) 鈴木健史¹・中山裕介¹・豊田栄^{1,3}・吉田尚弘^{1,3}・渋谷一彦²・辻和秀²
- 3B22 海洋エアロゾル中のハロゲン化アルデヒドの同定と大気化学的意味 (北大低温研) 河村公隆・今西克也
- 3B23 波照間・落石モニタリングステーションにおける大気中の酸素/窒素比の変動 (国立環境研究所) 遠嶋康徳・町田敏暢・向井人史・野尻幸宏・藤沼康実
- 3B24 大気中¹⁴CO濃度測定手法の検討 (名大学院工学) 後藤晃彦・森泉純・飯田孝夫
- 3B25 N₂Oの紫外光分解におけるアイソトポマー分別の波長依存性 (¹東工大総理工・²東工大理・³科学技術振興事業団) 鈴木健史¹・中山裕介¹・豊田栄^{1,3}・吉田尚弘^{1,3}・渋谷一彦²・辻和秀²

【C会場】

課題講演(1) (海洋と地球 海洋化学と地球環境研究の今後 (その2))

(9:00~12:00)

- コンピーナー: 益田晴恵・川端穂高・柳澤文孝
- 3C01 海洋低酸素事変と物質循環 (北大院理) 蒲生俊敬
- 3C02 海洋における元素の生物地球化学的循環 (名大大気水圏) 増澤敏行
- 3C03 海洋化学における時系列観測の意義と将来像 (国環研) 野尻幸宏
- 3C04 山形県におけるエアロゾルの化学組成と安定同位体組成の季節変動 (山大理) 柳澤文孝
- 3C05 海洋ガスハイドレートの環境インパクト (東大院理地球惑星) 松本良・戸丸仁
- 3C06 海底熱水活動が海水に与えるインパクト (九大院理) 石橋純一郎
- 3C07 海洋地殻中の海水の変質過程 (大阪市立大理) 益田晴恵
- 3C08 先カンブリア紀の海洋化学進化と変動要因 (東北大院理) 掛川武

一般講演 (堆積物)

(13:00~14:30) 座長:増澤敏行

- 3C09 鉄同位体分別機構解明の試み (東工大) 平田岳史
- 3C10 堆積物コアのバイオマーカー分布から推測する日本海過去八万年間の環境変化 (北大院地球環境) 中西貴宏・南川雅男
- 3C11 バイカル湖の湖底堆積物コア (BDP96 & 98) 中の有機成分による過去1000万年間の地球環境変動の推定 (¹大妻女大社情・²東邦大理・³東理大理・⁴国環研) 松本源喜¹・篠田朋子¹・田島美幸¹・松原未亜¹・高松信樹²・大矢巧³・竹村哲雄³・河合崇欣⁴
- 3C12 太平洋深海堆積物のREE組成 (名大院理地球惑星) 武邊勝道・山本綱志・足立守
- 3C13 過去約10万~23万年前の間の氷期と間氷期におけるバイカル湖湖底堆積物中の脂質分子組成の特徴について (¹東海大海洋・²国環研) 下川原誠¹・西村弥亜¹・河合崇欣²
- 3C14 古日本海堆積岩の地球化学的特徴と中期中新世環境変動 (慶応大理工) 木村進一・鹿園直建・野原昌人

3C15 中新世秋田県女川層ケロジエンの熱分解実験で生成する n アルカン，鎖状イソプレノイドの安定炭素同位体組成（都立大院理） 大山晃司・奈良岡浩・石渡良志

一般講演（堆積物）

（14：30～16：30） 座長：松本源喜

3C16 バイカル湖底堆積物コア BDP98中の植物プランクトン由来光合成色素の特徴変動（¹国環研・²静岡県立大） 相馬悠子¹・田中敦¹・相馬光之²・河合崇欣¹

3C17 鹿児島湾海底噴気孔周辺堆積物中の水銀の化学形（¹鹿児島大理・²鹿児島医・³海洋科学技術センター） 富安卓滋¹・坂元摩梨子¹・安藤哲夫²・橋本淳³・穴澤活郎¹・坂元隼雄¹

3C18 琵琶湖及び水月湖コア試料の化学分析から検出された晩氷期の環境変動の復元（¹北大院地球環境・²国際日本文化研究センター） 篠塚良嗣¹・豊田和弘¹・安田喜憲²

3C19 堆積物中のアルケノン組成による北部日本海の高海洋環境復元（地調） 古宮正利

3C20 オホーツク海における千年スケールの表層塩分変動（¹北大低温研・²北大院地球環境・³高知大海洋コア研究センター） 池原実¹・河村公隆¹・大場忠道²・村山雅史³・若土正暁¹

3C21 四国地方に分布するジュラ紀及び白亜紀石灰岩中の重金属元素含量（群馬大工） 相沢省一

3C22 無機化学組成から見た過去43万間の琵琶湖堆積環境の変遷（北大院地球環境） 豊田和弘・篠塚良嗣

3C23 北西太平洋中緯度域の深海堆積物中のバイオマーカーおよび炭素・窒素安定同位体比分析から得られる海洋環境（¹北大院地球環境・²海洋科学技術センター） 天羽美紀¹・南川雅男¹・山本浩文²

3C24 西グリーンランド堆積岩中の鉛・炭素・窒素同位体組成（¹広島大学理学部地球惑星システム学科・²東京工業大学理学部地球惑星科学科） 佐野有司¹・寺田健太郎¹・高畑直人¹・小宮剛²・上野陽一²

【D会場】

課題講演⁽³⁾（日本列島における初期人類文化の年代とその背景解明への理化学的アプローチ）

（9：00～12：00）

コンピーナー：豊田 新・早田 勉・齋藤和男

3D01 日本の前期・中期旧石器研究の現状と課題（東北福祉大） 梶原洋

3D02 火山灰編年学からみた前・中期旧石器の層位と年代（古環境研究所） 早田勉

3D03 植物珪酸体分析による竹笹類の植生変遷と氷期間氷期サイクル（古環境研究所） 杉山真二

3D04 旧石器遺跡の磁気層序学的研究（富山大理地球科学） 広岡公夫

3D05 Glass-fission-track dating methods and their application to tephra beds associated with Early Palaeolithic sites at Talamori and Kamitakamori, Japan. (¹Univ. Toronto, ²Paleoenvir. Res. Inst.) Westgate, J. A.¹, Sandhu, A. S.¹, Preece, S. J.¹ and Soda, T.²

3D06 前期・中期旧石器遺跡の光ルミネッセンス年代測定と課題（奈良教育大） 長友恒人

3D07 高森・上高森遺跡包含ローム層の光ルミネッセンス法による年代測定の試み（都立大理） 塚本すみ子・綿貫拓野・鈴木毅彦

3D08 考古時代を含む幅広い年代測定のための赤色域も可能な自動ルミネッセンス測定システムの開発（新潟大理） 橋本哲夫・中川貴博・高野雅人・洪徳均

3D09 Optically stimulated luminescence dating on quartz using only one sample（新潟大理） 洪徳均・橋本哲夫

課題講演⁽³⁾（日本列島における初期人類文化の年代とその背景解明への理化学的アプローチ）

（13：00～17：00）

コンピーナー：豊田 新・早田 勉・齋藤和男

3D10 高森遺跡関連のテフラの ESR 年代測定⁽¹⁾ 年間線量率の評価（岡山理科大） 多田弘樹

3D11 高森遺跡関連のテフラの ESR 年代測定⁽²⁾ 被曝線量の評価と年代の算出（¹岡山理科大・²古環境研究所） 豊田新¹・多田弘樹¹・早田勉²

3D12 上高森遺跡より出土した石器の被熱評価と年代（¹東大・²McMaster Univ・³大阪大・⁴金沢大・⁵東北福祉大・⁶東北旧石器文化研究所） 谷篤史¹・Jens Bartoll²・池谷元侑³・小村和久⁴・梶原洋⁵・藤村新一⁶・鎌田俊昭⁶・横山裕

- 平⁶
- 3D13 第四紀火山岩類の K-Ar, ⁴⁰Ar/³⁹Ar 年代測定法と人類学への応用の展望(地調) 宇都浩三・松本哲一・石塚治
- 3D14 高精度¹⁴C 測定システムと鳥海神代杉の年代測定(山大理) 澤木勇一・櫻井敬久・関口博昭・松本匡史・遠藤勝弘・郡司修一)

【ポスター会場】

- (コアタイム 12:00~13:00) ポスターセッション
- 3P01 博多湾汽水域における腐植物質の分析(九大院理) 西田典由・ダダウルドバララ・村江達士
- 3P02 過去10万~23万年前の間の氷期と間氷期におけるバイカル湖湖底堆積物中の脂質分子組成の特徴について(東海大海洋) 下川原誠
- 3P03 バイカル湖底堆積物中の宇宙線生成核種ベリリウム10と他の環境指標元素との比較(東大原子力研究総合センター・²ロシア科学アカデミー陸学研究センター・³東大理・⁴名大年代測定資料研究センター・⁵国環研) 堀内一穂¹・ユージン・ゴールドバーグ²・尾田武文³・中村俊夫⁴・小林紘一¹・松崎浩之¹・河合崇欣⁵
- 3P04 マリアナ前弧域にある蛇紋岩海山, コニカル海山で得られた炭酸塩チムニーの炭素・酸素同位体比, 及び放射性炭素同位体(静大・²静大・³海洋科学技術センター) 加藤和浩¹・和田秀樹²・藤岡換太郎³
- 3P05 ダービグイトシーケンスの地球化学的研究による古海洋環境推測(慶応大理工応用化学) 岩井修平・鹿園直建・木村進一・石原与四郎・野原昌人
- 3P06 中国太湖堆積物及び近隣地区柱状土壌の安定同位体分析(日大生物資源科学) 吉成亮・片瀬隆雄
- 3P07 山形市周辺地域の地球化学図() (地調) 今井登・岡井貴司・遠藤秀典・石井武政・田口雄作・上岡晃
- 3P08 中国地方の地球化学図と元素分布の特徴について(地調) 今井登・寺島滋・岡井貴司・御子柴真澄・金井豊・上岡晃・富樫茂子・松久幸敬
- 3P09 バイカル湖南湖盆堆積物中の過去2万年にわたる光合成色素の分布(静岡県立大環境科学研) 栗原孝太・奈良郁子・谷幸則・相馬光之

- 3P10 塩水中のメタン/エタン混合ガスハイドレート
の相平衡条件(地調) 前川竜男
- 3P11 ガスハイドレート生成にともなう水の同位体分別の実験的研究(地調) 前川竜男
- 3P12 雨水中に含まれる風成塵の Sr 同位体比の季節変化(九大院理) 浜本礼子・柳哮
- 3P13 連続フロー質量分析法による一酸化炭素の炭素・酸素安定同位体比定量法の開発その2: 直接導入法による測定(北大院理・東工大院総合理工・³科学技術振興事業団) 角皆潤^{1,3}・小松大祐¹・蒲生俊敬¹・中川書子^{2,3}
- 3P14 東アジア地域エアロゾル中の脂肪酸および低分子ジカルボン酸の特徴(桐蔭横浜大工) 森永茂生・鈴木茂礼・鈴木芳宗・松本桂一・矢島一樹・渡会澄子
- 3P15 日本の湿性降下物に含まれる非海塩性硫酸イオンの硫黄同位体比(¹山大理・²三菱マテリアル総研) 赤田尚史¹・柳澤文孝¹・川端明子²・上田晃²
- 3P16 山形県下におけるエアロゾルの鉛 210変化(地調・²山大理) 金井豊¹・柳澤文孝²
- 3P17 九州で採取した大気中硫酸化物, 浮遊塵および降下物の硫黄安定同位体比(¹九州環境管理協会・²九大院理・³九大院工付属環境システム科学研究センター・⁴九州電力株式会社総合研究所・⁵熊本大理) 川村秀久^{1,2}・松岡信明^{1,3}・田脇紳次⁴・百島則幸⁵
- 3P18 春期の富士山麓及び甲府市における降水中溶存成分の化学特性(¹山梨県環境科学研究所・²科学技術振興事業団) 京谷智裕^{1,2}・輿水達司¹
- 3P19 深海底スフェール中の¹⁰Beと²⁶AlのAMS測定による起源の推定(東大原子力研究総合センター) 松崎浩之
- 3P20 深海底堆積物および南極氷中から選別した磁性球粒の物理的, 化学的特徴(¹日大文理・²都立大院理) 小林貴之¹・永井尚生¹・海老原充²
- 3P21 神戸隕石: コンソーテIAM研究報告(¹神戸大理・²極地研・³シカゴ大エンリコフェルミ研究所) 中村昇¹・小島秀康²・原村宏²・留岡和重¹・ロバート・クレイトン³・トシコ・マエダ³
- 3P22 衝突コンドライトの Rb-Sr 同位体系の研究(¹神戸大自然科学・²神戸大理) 玉置美奈子¹・中村昇^{1,2}・山下勝行²
- 3P23 Y 81020 (CO3) コンドライト中のグロサイ

- トを含んだインクルージョンの不均一な酸素同位体組成 (東大) 比屋根肇
- 3P24 モルダバイト中の大きな気泡中の希ガス組成について (1阪大・2地調・3国立科学博物館) 松田准一¹・松本拓也¹・勢田明大¹・土山明¹・中島善人²・米田成一³
- 3P25 Ce-Nd-Sr 同位体系から見た月物質のCe異常の起源の考察 (名大院理) 谷水雅治・田中剛
- 3P26 西太平洋海底熱水系における堆積物全脂肪酸組成とその分布 (筑波大地球科学・2地調) 山中寿朗¹・坂田将²
- 3P27 pH センサーによる海底熱水活動域の化学マッピング (1電中研・2JAMSTEC・3RITE・4Meibius) 下島公紀¹・許正憲²・小池裕一³・辺見彰秀⁴
- 3P28 奥会津地熱地域・滝沢川層にみられる変質 (地調) 関陽児
- 3P29 酸・中性熱水から生じたシリカスケールに含まれる鉄の化学状態 (1東工大総理工・2九大理・3九大工・4東大総合文化) 宮崎あかね¹・横山拓史²・内田明子³・松尾基之⁴
- 3P30 ハワイ, ロイヒ海山基底部における低温熱水活動の地球化学的研究 (1琉球大理・2琉球大理工・3京都大原子炉・4地質調査所・5九大理・6JAMSTEC・7ハワイ大) 大森保¹・知念正和²・荒木正隆²・高田實彌³・石塚治⁴・石橋純一郎⁵・仲二郎⁶・A. Malahoff⁷
- 3P31 地層物質中の水質とウランについて (地調) 金井豊・上岡晃・関陽児・金沢康夫・濱崎聡志・月村勝宏・中嶋輝允
- 3P32 岩手県北部, 大規模トンネル内の湧水の起源と特徴について (1秋田大工学資源・2明治コンサルタント株式会社) 川原谷浩¹・三浦理司²・松葉谷治¹ (講演中止)
- 3P33 恐山宇首利湖堆積物中の脂質成分の分布 (東大院理地球惑星) 荻原成騎
- 3P34 陸一湖沼系における有機物の水素・炭素同位体比分布 (都立大院理) 力石嘉人・内藤卓・奈良岡浩
- 3P35 新潟・茨城・群馬の空気中のエタン・エチレン・アセチレン (地調) 猪狩俊一郎
- 3P36 分取キャピラリーガスクロマトグラフィー (PCGC) による分子レベル¹⁴C年代測定の地球化学的試料への応用 (1北大低温研・2国環研) 松本公平¹・河村公隆¹・内田昌男²・柴田康行²
- 3P37 西部北太平洋及び西部熱帯太平洋海域における海洋境界層内の低分子ジカルボン酸の分布 (1科学技術振興事業団・2北海道大学低温科学研究所) 持田陸宏¹・成川正広²・河村公隆²
- 3P38 西部北太平洋 (父島) 海洋エアロゾル中の低分子ジカルボン酸の季節変動 (北大低温研) 川端暁・河村公隆
- 3P39 愛知県中央部の地球化学図 (名大院理) 三村耕一・田中剛・川邊岩夫・山本鋼志・平原靖大・浅原良浩・南雅代・高橋 浩・谷水雅治・仙田量子・加地拓哉・近藤正史・倉田有里子・柴田信之介・高間智宏・武邊勝道・田中万也・森 康則・山下瑠佳・木村理恵・山下史哲・荒尾泰輔・伊藤信和・犬塚吉博・織田周平・近藤美貴子・林隆正・水谷朋子
- 3P40 海洋大気中における⁷Be, ¹⁰Be および²¹⁰Pbの分布 (日大文理) 多田亘・永井尚生・小林貴之
- 3P41 海洋におけるチタンの挙動と平均滞留時間 (北大院地球環境) 乗木新一郎・澤田理栄子・小池素子

訃報：浜口 博 名誉会員

本学会名誉会員の浜口博博士は、平成12年7月14日午後7時2分逝去されました。享年85歳でした。御冥福をお祈り申し上げます。

浜口博博士は、昭和12年東京帝国大学理学部化学科を卒業後、秋田鉱山専門学校、第一高等学校、東京文理科大学を経て、昭和27年東京教育大学教授となり、昭和39年には東京大学に移られました。この間、地球化学、宇宙化学、放射化学、分析化学の分野で多くの研究業績を残され、放射化学分析に関する研究で昭和60年紫綬褒章を受章されました。日本分析センターの設立に尽力され、東京大学退官後は平成2年まで理事長として研究、運営ならびに原子力行政に貢献されました。

浜口博博士は、本学会の前身である地球化学研究会の創設時からの会員で、何期も委員（現在の評議員）をつとめ、昭和43～46年には副会長、47～48年会長を歴任しました。（野津憲治会員）

2000年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告（TE 22）

氏名：高橋 浩（名古屋大学大学院理学研究科）

助成：海外渡航（イスラエル）

課題：17th International Radiocarbon Conference
における論文発表

鳥居基金の援助を受け、17th International Radiocarbon Conference（3年ごとに開催）に参加し、論文発表を行いました。本会は6月18日から23日までエルサレム近郊のホテルを会場にして開催されました。会期中213の発表（口頭85・ポスター128）があり、私は Modern Environment のセッションで「Balance and behavior of carbon dioxide at an urban forest inferred from the isotopic and meteorological approaches」という題目での口頭発表を行いました。本会は ^{14}C を用いた研究を報告するものですから、地球化学以外にも、宇宙科学や考古学などの分野からの研究報告も多くありました。私が発表したときにはセッションを開いている会場が2つしかなく、様々な分野の研究者が聞きに来ており、大変緊張しました。

今回発表した研究は、都市森林における二酸化炭素の収支と挙動について地球化学的手法と気象学的な

手法の両者を統合して考察したものです。森林における二酸化炭素の濃度や ^{14}C ・ ^{13}C の日変動観測から二酸化炭素の発生源を特定し、気象学的なデータから求めた森林樹冠での二酸化炭素フラックスとの関連から、森林の二酸化炭素が鉛直方向の混合と水平方向の移流から受ける影響について議論しました。このうち同位体を用いて得た結果については、1999年度の地球化学会年会において口頭発表を行っております。

発表後には何人かの研究者が個別にコンタクトを取りに来て下さいました。わざわざ順番待ちをしてまで質問をしたり意見を述べたりしてくれた方もいて、あやうく夕食を取り損ねるかと思うくらい長い時間の議論をしました。また、発表中にちょっとだけ紹介した事柄についても、意見を述べに来て下さる方もいました。そのことについての議論をすることになるとは思っていなかっただけに少し驚きましたが、大変有意義な時間を過ごすことができました。本会の Proceedings は Radiocarbon 誌に掲載されることになっており、現在は投稿原稿の査読作業に入っております。

会期中には、Weizmann Institute へのラボツアーがあり、研究所のあるテルアビブまでは数10キロも離れているにもかかわらず、大型バス4台もの大人数が参加しました。また、イスラエル国内の巡検があり、ユダヤの砦跡の見学や砂漠での露頭観察などをしました。その中でも参加者の最大の楽しみは「死海での浮遊体験」だったと思います。（生まれてはじめて水に浮いたと喜んでる人もいました。）

国際学会における口頭発表を行ったことや、多くの研究者と有意義な議論を行うなど大変意義深い学会参加となりました。海外派遣を決定して下さった日本地球化学会と関係各位に深く感謝しております。

提出日：2000年7月12日

2000年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：2000年2月12日(土) 12:30～18:00

場所：東京大学山上会館001会議室

出席者：松久幸敬会長、野津憲治副会長、石橋純一郎、植松光夫、海老原充、蒲生俊敬、河村公隆、日下部実、齋藤和男、坂田将、佐竹洋、田中剛、富樫茂子、中井俊一、中山英一郎、野崎義行、野尻幸宏、乗木新一郎、日高洋、益田晴恵、松田准一、村江達士、吉田尚弘（以上評議員）

1. 2000～2001年度評議員の追加委嘱：本会役員選出細則第6条3項に定める会長委嘱の評議員として、松田准一(会長) (GJ編集長)、蒲生俊敬(地球化学編集長)を承認した。
2. 幹事会メンバーの承認：会長提案に基づき、下記のとおり承認した(敬称略)。庶務：坂田将、会計：海老原充、会員：植松光夫、行事：吉田尚弘、ニュース：中井俊一、GJ編集：松田准一、地球化学編集：蒲生俊敬
3. 1999年度第4回評議員会議事録、及び2000～2001年度評議員懇談会メモの承認
4. 報告事項
 - 4.1 庶務・幹事会(坂田評議員)：【庶務一般】学術刊行物を内容とする郵便物発行団体所在地の変更届提出(12/14)、「地球化学」Vol.34の広告依頼(1/13)、2000年度学会事務センターとの契約締結(予定)【文部省】平成12年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(研究成果公開発表(B))の計画調書を提出(12/1)【学術振興会】平成12年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(学術定期刊行物)の公募要領等説明会に出席(10/8)、平成12年度同補助金の計画調書を提出(11/25)、平成11年度同補助金の事業計画変更承認申請書と実績報告書を提出(12/8)、平成11年度同補助金に係る代表者(会長)名変更届を提出(1/12)、平成11年度同補助金の確定通知書を受理(2/9)【学会会議】会員候補者及び推薦人の届出説明会に出席(12/2)、会員推薦管理会へ代表者(会長)名変更届提出(1/12)【幹事会】2000年2月5日12:30～17:00に東京大学山上会館203室にて開催。出席者：松久会長、野津副会長、植松、海老原、蒲生、坂田、中井、松田、吉田各幹事。第1回評議員会の議事内容について整理。
 - 4.2 会計(中井評議員)：1999年度の決算の概略について説明があった。単年度で283.5万円の黒字。監査を経た後に、次回評議員会で審議。
 - 4.3 編集
 - 4.3.1 GJ・出版関係(松田評議員)：【GJ】Vol.33は年度内に出版終了で総ページ数(本文)428。1999年は投稿数43編、うち12編受理、7編却下、残りは審査中。2000年1月31日現在完成原稿11編、審査中29編で順調。Vol.34, No.1は論文6編で100ページ、3月中に発送予定。Invited Reviewsを作ったことに伴い、Information for Contributorsを修正、Extended Instructions to Authors(毎年No.1に掲載)を作成。地球化学雑誌「21世紀の地球化学」に「Geochemical Journalについて」を寄稿。1997年のImpact Factorは0.351。科研費(出版助成)を獲得する観点からもImpact Factorを1.0まで上げたい。【出版関係】テラ学術図書出版とGJ、地球化学の販売に関する契約書(1998～2002年度)と覚え書き(2000年度)を交わした(2/5)。来年の覚え書きでは、発行部数を1,430から1,500に改める。「地球化学」の売り上げ最低額の算定式で6,000円という単価が使われているが、年間号数が2から4に変わったことが反映されているか確認が必要。【電子出版】GJの電子出版化に関する契約書(前期評議員会で審議済み)を交わした。
 - 4.3.2 地球化学(蒲生評議員)：2000年度発行のVol.34, No.1まで赤木前編集委員長の編集による。1999年の投稿原稿数は、特集号総説7、企画総説2、総説5、受賞記念論文2、原著論文5。現在受賞記念論文1、特集号総説5、原著論文1を審査中。2000～2001年度編集委員会は、蒲生俊敬委員長、赤木右、高田秀重、日高洋、川幡穂高、益田晴恵、松枝秀和委員により構成。
 - 4.3.3 ニュース(中井評議員)：No.160まで高橋和也前幹事が担当し、「地球化学」Vol.34, No.1と一緒に3月中に発行予定。No.161は6月初め発行予定で、5月連休明け頃に原稿締切。記事は年會関連、第2回鳥居基金助成の募集、日産学術研究助成の募集など。学会のホームページ関連は鍵裕之会員が分担。
 - 4.4 行事
 - 4.4.1 1999年度年会(松久会長)：1999年9月29日～10月1日に工業技術院筑波研究センター共用講堂と地質調査所において開催され、参加登録者467名、講演数301。詳細はニュースに掲載予定。非会員の講演の比率が高く(28%)、学会として今後検討が必要。講演申込と要旨の間で講演タイトルや著者の不一致が多かった。今回は実行委員会側でチェックしてプログラムを要旨に合わせた。【審議の結果、今後の年会では著者からの要請がない限りこの作業を行わないことを年会準備委員会への申し送り事項とした】
 - 4.4.2 2000年度年会(齋藤評議員)：期間は2000年9月25日(月)～27日(水)、山形大学キャンパスで開催の予

- 定。課題討論として4テーマを検討中。
- 4.4.3 2001年度年会(吉田評議員):関東圏私立大学関係者に可能性を打診中で、6月の評議員会で確定する。
- 4.4.4 2002年度年会(吉田評議員):関東圏外の大学より立候補があった。調整して来年度確定する。
- 4.4.5 2000年度地球惑星科学関連学会合同大会(吉田評議員):2000年合同大会が2000年6月25日~28日国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催される。
- 4.4.6 WPGM2000(吉田評議員):2000年6月27日から30日まで国立オリンピック記念青少年総合センターで開催。
- 4.4.7 Goldschmidt 2000(吉田評議員):2000年9月3日から8日まで、オックスフォード大学で開催。
- 4.5 会員(植松評議員):会員全般に係ること(入退会、会費請求、除籍等)は、今期から会員幹事の担当とすることが幹事会で決まった。3年以上の会費滞納者は60名(うち5年以上25名)。次回評議員会までに会費滞納者の扱いのルール(原案)を作成する。滞納者には個々に会費督促を行うとともに、5年以上の滞納者には除籍の警告も併せて行う。
- 4.6 委員会
- 4.6.1 学会賞受賞者選考委員会(日下部評議員):柴田賞(1件)、学会賞(7件(6名))、奨励賞(4件)の応募があった。
- 4.6.2 鳥居基金委員会(代理:坂田評議員):海外渡航2件、国内研究集会1件の応募があった。
- 4.6.3 地球化学書編集委員会(松久会長):近く編集委員に進行状況を確認する。
- 4.6.4 Geochemical Society 対応委員会(松久会長):【Goldschmidt Conference 日本開催について】2003年はIUGG札幌大会との関係からつくば(地調)を挙げての体制が作りにくいこと、2004年ならばつくばで受け入れ可能との提案があり、2003年で他の開催地とする具体的提案が出なかったことから、2004年につくば開催が適当との結論に達した。
- 4.6.4 電子出版化検討委員会(松田評議員):GJの電子出版化に関する契約書を完成させた。CD-ROM化の問題について今後検討する。
- 4.7 学術会議
- 4.7.1 地球化学・宇宙化学研連(野津副会長):第17期第7回委員会(1999/11/29)が開かれた。平成13年度科研費補助金(学術振興会関係)の審査のスケジュールが従来より2ヵ月早くなる。最近、当研連や地球化学会とIAGCの関係が希薄になっているとの見方があり、役員推薦などによる密接な関係の維持について意見交換された。
- 4.7.2 海洋科学研連(伏見会員,代理:野崎評議員):海洋学会と地球化学会の両方から野崎評議員が委員に推薦をされたため、地球化学会からは現業の人を推薦して欲しいとの要請が田中委員長からあり、気象研の伏見克彦会員を推薦した。第17期第6回委員会(1999/11/29)ではSCOR関係(日本の分担金増額、2002年に日本で総会を開催等)について審議した。第7回委員会(2000/2/5)では科研費(学術振興会関係)の複合領域に審査員を出すことを決めた。
- 4.7.3 陸水研連(赤木会員,代理:坂田評議員):第17期第4回委員会(1999/10/6)が開かれた。2003年IUGG対応委員会を作った。地球化学会は研連委員が対応委員を兼ねる。
- 4.7.4 鉱物研連鉱床学専門委員会(千葉会員,代理:日下部評議員):第17期第7回委員会(1999/11/12)が開かれた。詳細は議事録のとおり。
- 4.7.5 地球物理学研連惑星科学専門委員会(塚本会員,代理:坂田評議員):地物関連研連の統合化等、地物研連の改革について意見交換があり、次回の地球物理学研連に提案書を提出することとした。
- 4.8 連絡会等
- 4.8.1 地球惑星科学関連学会連絡会(吉田評議員):2001年の合同大会の運営に関して、従来の大学LOCを探したが、引き受け手がない。このため2001年以降の運営について、連絡会の大谷会長が新たに大学間LOC方式+業務委託を提案した。地球化学会を含む多くの学会はこれに賛同したが、地震学会とSGEPSSが反対し、対案として学会間LOC案を提案した。連絡会委員会で再度討議する。
- 4.8.2 学校科目「地学」関連学会協議会(蒲生評議員):第20回の会議が1999年12月15日に開かれた。議題は「21世紀の子供に伝えたい、地学のトピックス」など。
5. 審議事項
- 5.1 会員の異動
- 入退会者の承認:1999年9月1日から1999年12月31日までの入退会者を以下のとおり承認した(敬称略)。

【入会】13名(うち学生7名):

- 2111 TAYEL El Hasan Mu'tah University
 2112S 天羽美紀 AMOU Miki
 北海道大学大学院地球環境科学研究科
 2113S 赤田尚史 AKATA Naofumi
 山形大学大学院理工学研究科
 2114S 山崎光浩 YAMAZAKI Mitsuhiro
 東京工業大学大学院総合理工学研究科
 2115S 三輪達也 MIWA Tatsuya
 東京工業大学大学院総合理工学研究科
 2116S 占部太一郎 URABE Taichiro
 東京工業大学大学院総合理工学研究科
 2117 清水 徹 SHIMIZU Toru
 地質調査所資源エネルギー地質部
 2118 米田 穰 YONEDA Minoru
 国立環境研究所化学環境部
 2119S 金山晋司 KANAYAMA Shinji
 理化学研究所表面解析室
 2120 OSAE Shiloh
 Geological Survey Dept., Accra, Ghana
 2121 福田大輔 FUKUDA Daisuke
 地熱エンジニアリング(株)
 2123 長井孝一 NAGAI Koichi
 琉球大学理学部
 2122S 成川正広 NARUKAWA Masahiro
 北海道大学低温科学研究所

【退会】3名:川上紀,小坂知子(逝去),和田直子

この結果,1999年12月31日現在の会員数は以下の通りとなった。

	正会員(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1999年9月1日	1035	(121)	(7)	18	12	1065 (45)
入会	13	(7)		0		13 (1)
退会	3	(0)	(0)	0	0	3 (0)
変更	0	(0)	(0)	0		(2)
推挙	0				0	0
除籍	0	(0)	(0)	0		0 (0)
1999年12月31日	1045	(128)	(7)	18	12	1075 (48)

シニア会員の承認:正会員からシニア正会員への異動を以下の通り承認した。

【シニア正会員】1名:齋藤信房会員

5.2 第18期日本学術会議会員候補者,推薦人,推薦人予備者の選出:地球化学会から届出る第18期日本

学術会議の会員候補者として角皆静男会員を,推薦人として野津憲治副会長と海老原充評議員を,推薦人予備者として田中剛評議員を選出した。

5.3 平成13年度科学研究費審査委員候補者の選出:投票の結果,以下の候補者を選出した(敬称略)。なお推薦依頼が来た時点で,会長が有資格等の条件を考慮して,候補者の中から本学会の推薦者を決めることを承認した。

【細目「地球化学」第1段審査委員候補者】(大気水圏生物圏関係)河村公隆,野崎義行,増澤敏行,吉田尚弘,益田晴恵,蒲生俊敬,植松光夫,乗木新一郎,中山英一郎;(固体地球関係)松田准一,海老原充,田中剛,野津憲治,日下部実,佐野有司,益田晴恵,清水洋,齋藤和男

【分科「地球科学」第2段審査委員候補者】(大気水圏生物圏関係)野崎義行,乗木新一郎,蒲生俊敬,日下部実;(固体地球関係)田中剛,野津憲治,松田准一,清水洋

5.4 Goldschmidt Conference 日本開催準備委員会の設立:2004年 Goldschmidt Conference 日本開催を今年9月のOxford大会において提案するために表記委員会を設立することを承認した。続いて会長提案に基づき,委員会委員を下記のとおり承認した(敬称略)。松久幸敬(委員長),野津憲治,富樫茂子,篠原宏志,野尻幸宏,河村公隆,野崎義行,塚本尚義

5.5 学会内各種委員会委員の承認:会長提案に基づき,委員会委員を下記のとおり承認した(敬称略)。【名誉会員推薦委員会(2000~2001)】野津憲治(委員長),坂田将,植松光夫,田中剛,石渡良志,高岡宣雄

【将来計画委員会(2000~2001)】野津憲治(委員長),植松光夫,海老原充,清水洋,田中剛,奈良岡浩,益田晴恵

【電子出版検討委員会(2000~2001)】松田准一(委員長),蒲生俊敬,坂田将,海老原充,大隅多加志

5.6 学協会連合への対応

5.6.1 地質科学関連学協会:地球化学会の目指す連合化の方向(地質,地球物理,地球化学の3分野の連合)に対し,同協会の目指す方向に偏りがあり,設立時(今年3月)には参加しない。情報の提供を依頼する。

5.6.2 地理関連学協会:現時点では参加せず,情報の提供を依頼する。

5.6.3 学校科目「地学」関連学会連絡協議会：地球化学会の今期の委員を植松光夫評議員とすることを承認した。

5.6.4 地球惑星科学関連学会連絡会及び同合同大会の運営：学校間 LOC 案よりも学会間 LOC 案を支持するが、その選択においても学会の負担が大きくなることは問題。地球化学会の代表を現在（3名）より大幅に増やすことは困難。業者委託に伴う参加費の値上げも12,000円程度までが限界。これらの意見とともに、1998, 1999年度 LOC をされている評議員の意見を尊重し、3月11日に開かれる連絡会委員会で再度審議することとした。

5.7 前期評議員会からの申し送り事項の検討（幹事会の成文化、黒田基金、その他）

5.7.1 幹事会の成文化：幹事会で原案を作り、評議員会で提案する。会則の変更を伴う場合は、総会で提案する。

5.7.2 黒田基金の運営：将来計画委員会で検討する。

5.8 次回以降の幹事会、評議員会の日程

6月10日(土) 評議員会（東大山上会館）

9月16日(土) 幹事会（東大山上会館）

9月24日(土) 評議員会（山形大学）

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 (第17期・第8回) 議事録

日時：2000年5月18日(月) 13:30～16:50

場所：日本学術会議第4部会議室（6階）

出席者：野津憲治委員長，青木謙一郎，日下部実，田中剛，中村栄三，半田暢彦，松田准一，矢内桂三 各委員

1. 報告事項

(1) 学術会議関係（青木委員より）

2000年2月17日(木)に連合部会と第4部会がひらかれた。

A. 連合部会

- インターアカデミーパネル2000年会議（2000.5.15～18に東京国際フォーラムで開催）にかかるステートメント（案）等について審議。
- 第8回アジア学術会議（2000.5.13～19に開催）実施要領について検討。
- 安全に関する緊急特別委員会の審議状況につ

いて検討。久米委員長から、委員会が取りまとめた「安全学の構築に向けて」（案）が説明された。

- 教育・環境問題特別委員会の審議状況について。和田委員長から審議修正案の説明があった。「勧告」とするか「声明」とするかを検討中。
- 女性科学者の環境改善の推進特別委員会の審議状況について。尾本委員長から審議経過と二つのとりまとめについて説明があった。一つは「展望」（案）とし、女性科学者の環境改善に関して政府・大学などに対して行うもの、他の一つは「声明」（案）とし、日本学術会議の女性会員比率を高めるための内部努力に関するものである。
- 化学研究連絡委員会の審議状況について。大滝会員（第4部）からアジア諸国の発展に貢献するための「アジア化学・科学技術推進機構」設立提案（要望）について説明があった。

B. 第4部会

- 平成12年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦について。地質学・地理学グループから、国際地質科学連合第11回総会・評議会ならびに第31回万国地質会議に齋藤常正第4部会員、国際地球化学・宇宙化学協会2000年総会に矢内桂三地球化学・宇宙化学研連委員、第29回国際地理学学術会議に榎根勇第4部会員、国際地質学協会理事会に森田喬地質学研連委員、国際地質科学連合第11回総会ならびに第31回万国地質会議に西脇二一地質学研連委員、補欠として松枝大治鉱物学研連委員（補）が推薦された。
- 科学研究費補助金の分科細目別対応研究連絡委員会一覧表の修正について。分科「地球科学」では地球物理学の3細目に電波科学研連、細目「地質学」に地質研連と第四紀研連、「層位・古生物学」に地質学、古生物学と第四紀研連が加えられた。
- 平成14年度開催国際会議の共同主催申請について。12件（内第4部関連11件）の申請があり、8件を採択の予定。なお、地球科学関係からの申請はなかった。
- 国際対応委員会の改組について（申し合せ）

- の一部改正については、名称の変更(案)がなされた。
- 下記4件の対外報告が審議承認された。
 - ・ 化学研連「アジア化学推進機構の設立について(要望)」
 - ・ 地理学研連「環境問題についての地理学からの提言」
 - ・ 第4部会「理学(基礎科学)研究の推進について」
 - ・ 核科学総合研連「原子力の利用に伴う安全確保の体制について」
- (2) 地質科学総合研究連絡委員会(①との重複部分を省略、野津委員より)
- 第17期7回：地質科学関連の科学研究費審査委員について。既報のように、分科「地球科学」の第2段審査委員の数が6名となり、各分野に対する平成12年度の割り当ては、地球物理学2名、地質科学3名、地球化学1名とした。今年度地質学に割り当てられた3名のうち1名は地球物理学と地質科学で交替に使用するが、各細目への申請・採択件数を見ながら配分を調整することとした。なお、野津委員から科研費審査委員の配分に関連して従来の申し合せや慣習の引き継ぎの正確な履行が要望され、了解された。
 - 第17期8回：地質科学関連学協会連合については、これまでに14学協会から参加の申し込みがあった。未回答2、参加見合わせ1(日本地球化学会)、オブザーバー参加(日本火山学会)。運営は選出された執行部にゆだねるが、当分は地質科学総合研究連絡委員会が協力することとした。
- (3) 第17期研究連絡委員会・専門委員会の活動状況に関するアンケートがあり、委員長が回答した。そのなかで本委員会の開催数は8回、出席率は70%であるが、出席率に偏りがあることがわかった。
- (4) 平成14年度科学研究費補助金に係る「時限付き分科細目の設定」の検討依頼があったが、地球化学・宇宙化学研連から新規設定の要望はない旨回答した。
- ## 2. 審議事項
- (1) 平成13年度科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦
- 推薦依頼：本研連では細目「地球化学」の第1段審査委員6名のうち、継続委員3名を除く3名の2倍の6名の審査委員候補者の推薦依頼を受け、昨年と同じ18学協会のうち、日本地球化学会には改選数の2倍の6名、それ以外の学協会には各1名の審査委員候補者の推薦を依頼した。その結果、14学協会から19名の第1段審査委員候補者の推薦を得た。なお、分科「地球科学」の第2段審査委員候補は継続であるので、学協会への推薦依頼は行わなかった。
 - 選考：日本地球化学会から推薦された候補者のみ、学会の推薦順位に従い、上位と下位に分けた後、全候補者を分野A(固体地球関係)とB(大気・水圏・生物圏関係)に分け、上位3名の候補者は従来の投票手続きに従って候補者を選出した。下位3名の候補者は、分野A,B別に一括して選出した。選出にあたっては年齢や同一の機関に片寄らないなど、審査委員候補者の推薦に係る留意事項に従った。以上の結果選ばれた第1段審査委員候補者6名に順位を付けて推薦することとした。
- (2) 科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦方法について
- 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会は、細目「地球化学」が設定されて以来、科学研究費審査委員候補者推薦の任にあたってきた。その推薦候補者が特定の学協会や分野に片寄ることの無いよう、関連18学協会から推薦頂いた候補者の中から本研究連絡委員会で検討の上、最終的に投票で候補者を選び、第4常置委員会に推薦してきた。毎年公正な審査がなされてきたと自負してはいるものの、一部には、毎年推薦するが、一度も委員になっていないとの声もあった。そこで各学協会に対し、この選出方法についての意見を伺うアンケートを実施した。18学協会の内、7学協会から回答を頂き、それを基に意見を交換した。その結果、これまで実際に審査委員として任命された方々は(公表されている平成5年度から11年度分まで、第1段、第2段も含めて)は9学協会から推薦されており、地球化学会から推薦した候補が実際の委員になっている割合は40%弱である事から見て、この選考方法はうまく機能しているとの認識が得られた。しかし、選考結果が広く知られていないために、各学協会が憶測を抱いてい

るのではと考えられた。これまでの選考方法は優れた方法で、むしろその結果を広く宣伝することが重要との意見が大勢であった。

- (3) 次期地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の構成
第18期研連委員は学術会議指名委員、学協会の推薦委員に加え、地球物理学研連の宇宙惑星系及び流体系にそれぞれ1名が割り当てられる予定であるが、地球物理学研連へ推薦を依頼する委員は、いつも発令がおくれるので、その対応を議論した。

その結果、今17期の内に来18期委員の推薦を依頼することにした。

- (4) その他
○ 設立準備がすすめられている総合地球環境学研究所および、研究と教育への2極分化が企画されている大気圏科学研究所と地球化学・宇宙化学の将来像について情報と意見を交換した。
○ 次回(第9回)委員会は8月31日(木)13時30分からを予定。

日本学術会議鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会(第17期,第8回)議事録

日時:平成12年3月6日(月) 15:30~17:00

場所:日本学術会議6階第7部会会議室

出席者:石渡明(書記)・上野宏共・島田允堯・千葉仁・根建心具・松枝大治(委員長代行)・渡辺洵

欠席者:島崎英彦(委員長)・溝田忠人(欠席者は書面にてコメント)(五十音順)

本会議に先立って、13:30~15:30に鉱床学専門委員会との合同会議が行われた。これについての報告は省略する。

(1) 諸報告

直前の合同会議で報告されたので、省略。

(2) 対外報告の配布先について

今期の鉱床学専門委員会で作成し、既に刷り上っている対外報告をどこに配布すべきか議論した結果、以下のような候補が挙がった。

- ア. 日本学術会議の関連研究連絡委員会の代表
イ. 主要な政党の事務所, 主な国会議員の事務所
ウ. 資源素材学会など関連諸学会の事務局
エ. 大学の理工系学部の学部長

オ. 文部省・科学技術庁・資源エネルギー庁などの役所

カ. 経団連・銀行協会など

一部の委員から、今回の対外報告がエネルギー資源に全く論及していないこと、「役に立つ学問」を強調して純粋科学としての重要性を軽視していることなどの反省が述べられた。

(3) 第17期鉱床学専門委員会の活動内容について

ア. 対外報告を作成し、既に印刷した。現在、上で諮ったように配布準備中である。

イ. 鉱床学関連研究者・院生名簿を作成すべきか否か

これについては、従来型の名簿を作っても、既に時流に合わず、あまり利用価値がないという否定的意見が多かった。全国の鉱床学関連の教室にリンクしたホームページを作成し、資源地質学会や岩鉱学会のウェブサイトに載せたらどうかという案が出て、松枝委員長代行がホームページ掲載について学会に打診することになった。

ウ. 日本学術会議の研究連絡委員会の統廃合

第18期に行われる統廃合で、鉱床学専門委員会やそれより小規模の専門委員会が、廃止のターゲットになる可能性が指摘された。これに関連する資料として、松枝委員長代行から、日本鉱業協会・資源産業技術戦略策定委員会による「資源産業技術戦略」という大きな報告書の一部のコピーが配布された。これは30年先の資源確保視む具体的な戦略であり、鉱床分野の「科学技術基本法」というべきもので、これをよく勉強して、鉱床学分野を活発化していく必要が強調された。

(4) その他

ア. 科研費問題(鉱床分野の科研費申請件数を増やそう)

イ. 大学の独立行政法人化に向けての対応(現状報告と意見交換)

ウ. 鉱床学専門委員会自体の存在意義(踏み込んで議論すべきという提案)

以上

日本学術会議 海洋科学研究連絡委員会 第17期第8回議事録

日時:平成12年4月3日(月) 13時30分~16時

場所:日本学術会議2階大会議室

出席者:田中,有賀,河村,関,谷口,角皆,友定,

花輪, 半田, 伏見, 松山 (敬称略)

田中委員長の司会により, 大要以下の議事がなされた。

1. 前回の議事録(案)を承認した。

2. 報告事項

1) 委員長報告事項

・平成13年度科学研究費補助金審査委員の推薦について

海洋科学研連が, 科研費「複合領域 環境科学(分科)環境保全(細目)」の関係研連となったことにより, 審査員一名の枠が確保された。審査員の推薦を5月19日までにやりたい。(審議の結果, 本来は本研連の各関係学会から推薦を受けるべきであるが, 時間の都合上, 今回は特例として研連主導で人選を行うこととし, 日本海洋学会会長(角皆委員)に推薦を依頼することとした。)

・SCOR/IGBP 役員候補者の推薦について

今年11月に開催される第25回 SCOR 総会において, 役員(会長, 副会長, 事務局長)の改選が行われるため, 候補者の推薦依頼がきている。(審議の結果, 角皆委員を引き続き副会長(2期目)として推薦することとした。)

2) 各委員からの報告

・花輪委員から, 平成3年に行った対外報告「わが国の海洋研究船の充実について」について, その後の処理状況またはその影響・効果について4月3日までに回答するよう要請があったことが報告された。(花輪委員が用意した回答案を基に審議を行い, 出された意見を勘案してまとめて回答することで花輪委員に一任することとした。)

3. 審議事項(練習船問題および今後の活動方針について)

・河村委員から, 第17期研連の対外報告をまとめるにあたって「海洋科学教育・研究のための船舶運営機構に関する検討小委員会(河村委員長)」が用意した検討資料「わが国の海洋教育・研究のための船舶の運営機構に関する報告」, 花輪メモ「水産系大学・学部練習船の今後のあり方について」, 松山メモ「海洋科学・地球環境科学における船舶の位置」について説明があり, 審議を行っ

た。花輪メモを骨子にして対外報告をまとめることとし, 盛り込むべき観点等について議論した。関連研連と共同で対外報告を行う場合には, 第6部及び4部の副会長の承認が必要なことから, 次回(6月29日予定)の研連委員会でドラフトのまとめを行い, 第18期委員会で対外報告として提出できるよう準備することとした。

4. 席上回覧資料

・海洋地質図(豊後水道南方表層堆積図, 駿河湾海底地質図): 地質調査所

・Turning to the Sea: America's Ocean Future

5. 次回(第9回)は, 6月29日(木) 13時30分より日本学術会議で行う。

以上

2001年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は, 自然科学の分野で, 顕著な研究業績を収めた女性科学者に, 毎年, 賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは, さらに, 海外のシンポジウム等に出席し, 論文を発表する若手の女性研究者にたいし, 研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は, 本会を母体として新設された, 公益信託(1990年3月13日文部省認可)「女性自然科学者研究支援基金」(受託者登用信託銀行株式会社)から支出されます。つきましては, 下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

本賞は自然科学の分野で, 顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし, 下記の推薦締切日で50歳未満)に贈呈します。

1. 本賞は賞状とし, 副賞として賞金(30万円)をそえます。

2. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。

3. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目, 推薦理由(400字程度), 略歴, 主な業績リスト, 主な論文別刷10編程度を, 本会事務所までお送り下さい。

4. 締切は2000年11月30日(必着)。

5. 第21回の賞贈呈式は、2001年5月、東京において行う予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第18回(1998) 千葉大学大学院自然科学研究科教授

西川恵子博士

「超臨界流体の研究」

第19回(1999) 東京医科大学助教授

持田澄子博士

「神経伝達物質の放出機構の研究」

第20回(2000) 東京大学大学院農学生命科学研究科

助教授 中西友子博士

「植物における水及び微量元素の挙動」

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者(各締切日において満40歳未満)の略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由を記入して、本会事務所までお送りください。
締切は2000年11月末日と、2001年4月末日の2回。

応募先: 女性科学者に明るい未来をの会

〒166 0002 東京都杉並区高円寺北4 29 2 217

Tel: 03 3330 2455 (Fax 兼用)

なお賞・助成とも、応募のための所定の用紙(推薦書)が本学会(庶務幹事)にありますので下記宛にご請求下さい。

坂田 将

〒305 8567 つくば市東1 1 3

工業技術院地質調査所地殻化学部

Tel: 0298 61 3720, Fax: 0298 61 3533

E-mail: ssakata@gsj.go.jp

平成12年度(第22回) 沖縄研究奨励賞候補者 推薦依頼について(学会推薦)

④沖縄協会から、標記候補者の推薦依頼が当学会に来ております。推薦(応募)要領を以下にご案内致し

ます。

1. 目的

沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目的としています。

2. 表彰

受賞者には、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰します。

3. 対象・候補者

沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学、人文科学又は社会科学)を行っている新進研究者(又はグループ)3名以内に贈ります。年齢50歳以下(平成12年7月15日現在)の方で、出身地及び国籍は問いません。

4. 推薦者: 本学会の会長より推薦を行います。

5. 推薦件数

当学会に対する推薦件数の制限はありません。

6. 推薦(応募)手続き

所定の応募用紙を本学会庶務幹事(下記)にご請求いただき、必要事項を記入の上、選考書類(研究論文、研究業績目録等)とともに、庶務幹事宛にお送り下さい。9月20日(水)必着。

坂田 将

〒305 8567 つくば市東1 1 3

工業技術院地質調査所地殻化学部

Tel: 0298 61 3720, Fax: 0298 61 3533

E-mail: ssakata@gsj.go.jp

7. 審査選考など

選考委員会(沖縄協会会長委嘱の委員から構成)にて審査、決定します。受賞者記者発表は平成12年12月11日頃です。贈呈式は平成13年1月18日に、那覇市内のパシフィックホテル沖縄で開催します。受賞者には贈呈式の後、受賞記念講演を行っていただきます。

平成13年度笹川科学研究助成の募集について

④日本科学協会から、標記助成募集の案内が学会に来ております。募集要領の要点は以下のとおりです。

本助成は、若手研究者の育成並びにその研究助成を目的とし、単年度(平成13年4月1日から平成14年2月10日まで)に成果をとりまとめられる研究課題に対して100万円を限度で助成を行います。対象領域は人文科学、社会科学、および自然科学(医学を除く)で、募集対象者は平成13年4月1日現在35歳以下の大学・研究機関等の研究者、大学院生等です。募集締切は平

成12年10月31日(火)必着で、申請書を下記宛にお送り下さい。

財団法人財団法人日本科学協会
〒105 0001 東京都港区虎ノ門1 11 2
日本財団第2ビル3階
Tel : 03 3502 1931, Fax : 03 3580 8157
E-mail : LDG01360@nifty.ne.jp
http : //www.jss.or.jp

選考は笹川科学研究助成選考委員会により行われ、助成金の決定は平成13年4月中に通知します。募集要領、申請手続きの詳細については、上記協会ホームページをご参照下さい。

第44回粘土科学討論会

主催：日本粘土学会
共催：日本地球化学会 ほか
会期：平成12年10月2日(月)、3日(火)、4日(水)(見学会)
会場：北海道大学学術交流会館
第1日目：9：00～12：00 口頭発表(2会場)
13：00～15：00 特別講演
() 箕浦名知男(北海道大学総合博物館・助教授)
題目：化石で探る地球の歴史
() B. Theng (Manaaki Whenua-Landcare Research, New Zealand)
題目：Research and developments in clay-organic composite materials
15：30～17：30 シンポジウム
「粘土・有機相互作用 生命の粘土鉱物起源説の検証」
1) 橋爪秀夫(無機材研)
化学進化における粘土鉱物の役割
2) 宇佐美久尚(信州大学・繊維)
粘土層間場を利用する光電子移動反応
3) 島津省吾(千葉大・工)
粘土鉱物層間の化学修飾と分子認識触媒への応用
4) 成田榮一(岩手大・工)
陰イオン性粘土と有機化合物の相互作用
第2日：9：00～11：00 口頭発表(2会場)
11：00～12：00 総会
13：00～15：00 口頭発表(2会場)
15：00～17：00 ポスター討論
参加登録料：会員(共催学会員を含む)2,000円、学生会員1,000円、非会員3,000円、講演

要旨集代 3,000円

懇親会：2日(月)シンポジウム終了後、北海道大学百年記念館で開催。参加費：一般5,000円、学生3,000円

見学会：4日(水)午前9時、北海道大学学術交流会館前に集合。目的地：北海道大学学術交流会館前集合 開拓記念の村見学 北海道開拓記念館見学(各自食堂にて昼食) 北海道農材工業(株)野幌セラミック工場見学 江別市セラミックアートセンター見学 北海道立工業試験場野幌分場見学 JR野幌駅解散(場合によってはJR札幌駅解散)。参加費：一般5,000円、学生3,000円程度

連絡先：北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻
山岸皓彦

Tel : 011 706 2769または011 706 3810,

Fax : 011 706 4909

E-mail : yamagish@sci.hokudai.ac.jp

First Announcement

International Symposium on Isotopomers (ISI2001)

Yokohama, Japan

24-27 July, 2001

Background : Isotopes have been used to trace material cycles in the atmosphere, the oceans, the terrestrial environment and the biosphere. Researches have been developing from single isotope analysis to multi-isotope tracer analysis. Recent progress in the site-specific analysis of isotopes in isotope-containing molecular species such as organic molecule analysis on site-specific NMR and pyrolysis IRMS, theoretical considerations on ozone and nitrous oxide very recently by several determining methods. The term, isotopomer (isotope-containing molecules), includes two aspects ; multi-isotopes and intramolecular isotope distributions. Since the term, isotopomer, is relatively new, so that it is accepted in this Symposium as a widely defined term including isotopes.

Objective : The focus of the Symposium is to exchange the latest scientific achievements in the

measurement and analysis of isotopomers from the studies of environmental changes to further application in a variety of fields. The Symposium will call for papers from a wide area of researches on isotope-containing molecules with or without site-specific information to achieve this objective as follows.

- Methodology innovations for isotopomers by mass spectrometers with and without continuous-flow modifications, tunable diode laser absorption spectrometers, FTIR, site-specific NMR and others.
- Synthesis and maintenance of isotopomer standard materials and inter-laboratory calibrations.
- Observations of isotopomer variations in the atmosphere, the oceans, the terrestrial environment and the biosphere.
- Theoretical considerations and simulation experiments on the equilibrium and kinetic isotopomer effects of the important processes and mechanisms.
- Estimates of the cycles of materials by data simulation analysis and/or models.
- Further applications of isotopomers in the various fields.

The papers to be presented at the Symposium will be composed of invited papers, accepted oral and poster papers. Participation by younger generations of the isotope and/or isotopomer community, as well as by newcomers to the community is especially encouraged in addition to more experienced researchers.

Japan Science and Technology Corporation organize this Symposium with co-organization of International Atomic Energy Agency and some other potential organizations which will be arranged in second announcement. This symposium is closely related with a half-day session on isotopomers in Third IAEA Conference on the Study of Environmental Change Using Isotope Techniques, 23–27 April 2001, Vienna, Austria, which will be co-organized by JST.

Date, Venue, and Technical Tour : The Sympo-

sium will be held for 4 days from 24 to 27 July (Tuesday to Friday) in 2001. The venue for the Symposium is Yokohama, 100m to the Yokohama port facing to the Pacific, the historical place for opening of the once and long closed Japan 100 years ago, one of the main site of the 2002 world cup also, 1.5 hr direct limousine from Narita Int'l Air Port, and 20 km south of Tokyo down town. Pre-symposium technical tour is scheduled on 24 July for laboratories in Yokohama Campus of Tokyo Institute of Technology and some research labs will be involved.

Important dates of the Symposium : The tentative schedule of the Isotopomer Symposium is as follows (subject to change) :

May 2000 Distribution of the First Circular and opening of a website in our url (http://ny-lab.chemenv.titech.ac.jp/ISI_2001/isi_2001.html) for announcing the Isotopomer Symposium (ISI2001).

August 2000 Distribution of the Second Circular for providing Symposium information (members of the program and local committees, sessions, deadlines for short and extended abstracts and manuscripts of the proceedings, registration and hotel reservation forms, limited support of traveling expenses, and so on) and updating of the website.

January 2001 Deadline for submission of short abstracts for the review process and early registration.

May 2001 Deadline for submission of extended abstracts, hotel reservations and late registration.

June 2001 Final announcement of the Symposium.

July 2001 International Isotopomer Symposium, submission of manuscripts of the proceedings.

* We would appreciate it if you could send a copy of the announcement to the scientists who might be interested in the Symposium but have not received

this announcement. Please let us know if you can nominate potential contributors to the Symposium.

Reference :

Scientific contents of the Symposium

Naohiro Yoshida

Prof., PI of CREST Project on isotopomers, JST
Department of Environmental Science and Technology

Interdisciplinary Graduate School of Science and Engineering

Tokyo Institute of Technology

4259 Nagatsuta, Midori-ku, Yokohama 226-8502,
JAPAN

Phone + 81 45 924 5506 (office),

Fax + 81 45 924 5506

E-mail : nylab@chemenv.titech.ac.jp

URL : <http://nylab.chemenv.titech.ac.jp/ISI2001/isi2001.html>

Secretariat of the Symposium

Ms. Naomi Hori

Secretary to Dr. N. Yoshida at JST

Department of Environmental Science and Technology

Interdisciplinary Graduate School of Science and Engineering

Tokyo Institute of Technology

4259 Nagatsuta, Midori-ku, Yokohama 226-8502,
JAPAN

Phone + 81 45 924 5506 (office),

Fax + 81 45 924 5506

E-mail : nylab@chemenv.titech.ac.jp

Administration of the Symposium

Mr. Shigeo Sahto

General Manager

Kaya Environment Research Office

Japan Science and Technology Corporation

Tel + 81 3 5469 0502 , Fax + 81 3 5469-0503

Email : ssahto@envr.crest.jst.go.jp

Reply Sheet : If you are interested in receiving future circulars as they become available, please fill

out the form below and return it to the symposium secretariat either by E-mail, Fax, or post. Your answer, by 31 July 2000, on this matter will greatly help us arrange this Symposium. We are looking forward to hearing from you.

* Please complete in block letters.

* Please complete in block letters in English and in Japanese, if you are Japanese.

Last Name :

English

Japanese

Middle Name :

English

Japanese

First Name :

English

Japanese

Title :

English

Japanese

Affiliation :

English

Japanese

Address :

English

Japanese

Phone :

Fax :

E-mail Address :

URL :

Should you have any inquiries, please do not hesitate to contact either Dr. Naohiro Yoshida, Ms. Naomi Hori, and Mr. Shigeo Sahto as secretary.

林原フォーラム「水と地球と人間」のご案内

下記の要領で、地球温暖化と水・地球深部の水・水と人間生活・気候と文明をテーマに、林原フォーラム「水と地球と人間」を開催いたします。多数のご参加をお待ちしております。

日時：平成12年9月7(木)・8(金)・9(土)

会場：岡山国際交流センター

言語：専門部会(9月7・8日)は英語，一般講演(9月9日)は日本語(英語講演には通訳がつきま

す)

9月7日(木)：「地球温暖化と水(Water and Global Warming)」

世話人：小野有五(北海道大学)

R. Bradley, T. Mikami, J. Cole, V. Markgraft, Y. Tanimoto, E. Matsumoto, M. Thamban, J. Overpeck, T. Yasunari, Singyhi A. K, G. Zhengtang, H. Kitagawa, Y. Inouchi, P. Dekker, Y. Ono など

9月8日(金)：「地球深部の水(Water in Deep Earth)」

世話人：谷口真人(奈良教育大学)

Y. Tatsumi, K. Wang, A. Taira, M. Kinoshita, W. C. Burnett, W. M. Edmunds, J. Shimada, M. M. Monnin, T. Gamo, K.L. Damm, T. Naganuma, J. P., McKinley, U. Tsunogai, H. Miyamoto, Y. Murakami, M. Taniguchi など

9月9日(土) 一般講演会

午前：「水と人間生活」，世話人：吉原徑太郎(北陸先端科学技術大学院大学)

西 信行(分子科学研究所)：水の物理・化学

荒田洋治(機能水研究所)：水と生物

榎根 勇(愛知大学)：水と自然

午後：気候と文明，世話人：小野有五(北海道大学)

榎根 勇(愛知大学)：インダス文明の崩壊原因は「聖河サラスプアティー」の河道変化?

R. Bradley(マサチューセッツ工科大学)：地球温暖化は氷期開始の引き金を引くか?

専門部会に参加ご希望の方は下記までご連絡くださ

い。

参加申し込みおよび問い合わせ先：

(社)林原共済会

Tel：086 224 4311，Fax：086 224 0997

E-mail：found@hayashibara.co.jp

http://www.hayashibara.co.jp/index.html

文責：小野有五(北海道大学)・谷口真人(奈良教育大学)

21世紀に向けてのわが国古海洋学の展望 プレ第7回国際古海洋学会議(IPC7)

主催：日本学術会議第四紀研究連絡委員会

後援：日本第四紀学会・日本古生物学会・日本地質学会・日本地球化学会・日本海洋学会

開催日時：平成12年11月6日(月) 午前10時～午後5時

開催場所：日本学術会議大会議室

開催趣旨：古海洋学は、地球表層の環境変化を調べる比較的新しい学問分野であるために、きわめて学際的で地球化学、海洋物理学、気候モデリング、人類学、地質学、古生物学など多岐にわたる。このために、既存の学会活動だけでは古海洋学全体を俯瞰することが困難であり、各々の分野における最新の研究成果を時々持ち寄って披露し合うことが不可欠である。第7回国際古海洋学会議(IPC7)が日本学術会議の共同主催によって平成13年9月16日(日)から9月22日(土)まで札幌市メディアパークにおいて開催される予定である。本会議に先立ち日本開催の意義を再確認することを目的として国内シンポジウムを企画した。したがって、このシンポジウムは通常の研究発表シンポジウムではなく、特定のテーマのもとに全国的あるいは世界的規模で設定されているプロジェクトの現状と研究成果を紹介するものである。

講演者：

- ・あいさつ 鎮西清高(前日本学術会議第4部幹事)
- ・経過説明 小泉 格(北大・院・教授)
- ・IPC7の準備状況 岡田尚武(北大・院・教授)
- ・IPC7のテーマと講演者プロフィール 高橋孝三(九大・院・教授)
- ・統合深海掘削計画(IODP) 木下 肇(海洋科学

- 技術センター・理事)
- ・IODP 地球環境変動 WG 多田隆治 (東大・院・教授)
- ・日本周辺での最近の海洋掘削結果 平 朝彦 (東大・海洋研・教授)
- ・COE オホーツク海の学際的研究 中塚 武 (北大・低温研・助教授)
- ・西赤道太平洋の暖水塊プール 川端穂高 (地調・海洋・主任研究官)
- ・南極アイスコア (ドーム富士) と気候史復元 渡辺興亜 (極地研・教授)
- ・まとめ 大場忠道 (北大・院・教授)

世話人: 鎮西清高・小泉 格・大場忠道
連絡先: 小泉 格

Tel : 011 706 2733, Fax : 011 746 0394

E-mail : itaru@ep.sci.hokudai.ac.jp

2000年度地球化学若手会のご案内

地球化学若手会は、地球化学研究に携わる全国の若手研究者・学生が一同に会し、研究発表を行い、議論し、親睦を深め、情報交換を行うことを目的に活動しています。

特に学生参加者の多いことが特徴です。今年度は、ゲスト講演者による特別講演、参加者が研究報告を行う一般講演 (発表時間は自己申告)、ショートタイム (5分程度) の研究紹介を行う予定です。

日程: 11月3日(金) 15:00 受付開始

11月5日(日) 昼食後解散

場所: 培本塾会館

〒421 0422 静岡県榛原郡榛原町静波108番地

Tel : 0548 22 0136

参加費: 一般 12,000円, 学生 9,000円

(宿泊費・食費・交流会費を含む; 学生への旅費の援助を行う予定)

特別講演: 滋賀県立大学環境科学部 中山英一郎先生
「海水中の微量元素のコンタミネーションと闘って20年」

静岡大学理学部 鈴木 款先生

「21世紀の海洋化学を考える」

協賛: 静岡県資源環境技術研究会

より多くの方のご参加をお待ちしております。

参加の申し込み、お問い合わせ先 (申し込み締め切りは10月20日):

杉山裕子 姫路工業大学環境人間学部

〒670 0092 兵庫県姫路市新在家本町1 1 12

Tel : 0792 92 1515, Fax : 0792 93 5710

E-mail : sugiyama@hept.himeji-tech.ac.jp

石川義朗 (財)環境科学技術研究所

環境シミュレーション研究部

〒039 3212

青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字家の前1 7

Tel : 0175 71 1409, Fax : 0175 71 1401

E-mail : ishisim@ies.or.jp

第23回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

南極域では、大気 雪氷 海洋圏における環境変動機構の解明を目的として、物質循環や氷床変動システムに関わる集中的観測と、微量気体成分・エアロゾルや氷床氷縁の変動を観測するための長期的モニタリングが実施されています。

また、国内では「氷床ドーム深層掘削観測計画」により得られた深さ2,500 m までの氷床コアの解析が進み、南極深層コア研究も新たなステージを迎えようとしています。

一方、北極域ではスバルバル、グリーンランド、カナダ、シベリア等多地域において、大気、雪氷、海洋に関する多岐にわたる観測が行われています。

特に本年3～4月には、スバルバルにおいて航空機と地上を同期させた大気の集中観測が行われました。

これらの諸観測から得られた資試料や衛星データ等の解析結果はもとより、南北両極・寒冷域を主な対象とした大気科学、雪氷学、海洋学等に関する研究成果、研究展望などを議論するシンポジウムを開催いたします。

広く研究発表を受け付けておりますので、ふるって御参加下さい。

日時: 平成12年11月29日(水)・30日(木)

会場: 国立極地研究所講堂

発表申込締め切り: 平成12年9月30日(土) 必着

連絡先: 国立極地研究所

東久美子 (気水圏シンポジウム係)

岡崎美紀

〒173 8515 東京都板橋区加賀1 9 10
Tel : 03 3962 3275 or 03 3962 7125 ,
Fax : 03 3962 5719
Email : icesamp@pmg.nipr.ac.jp

第7回地下水・土壌汚染と その防止対策に関する研究集会

日時：2000年12月12日(火)・13日(水)

9：00～17：00（予定）

場所：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北8条西5丁目）

主催：(社)日本水環境学会，日本地下水学会，(社)土壌環境センター

後援（予定）：環境庁，厚生省，北海道，(社)環境科学会，(社)地下水技術協会，(社)地盤工学会，(社)土木学会，(社)日本化学会，日本環境化学会，(社)日本水道協会，日本地球化学会，(社)日本農芸化学会(社)本薬学会，日本陸水学会，廃棄物学会，SCOPE-JAPAN

発表分野：地下水・土壌汚染の実態・原因・経路に関する調査・検討，汚染物質移動の解析・観測，汚染の移動機構，汚染の防止対策・修復技術・観測例・修復評価，汚染の影響評価，産業系排水の管理と地下水・土壌汚染，放射性物質による汚染，地質・土壌に起因する自然汚染など

参加費：6,000円

懇親会：2000年12月12日(火) 18：30～（予定）

（会場）京王プラザホテル札幌

（札幌市中央区北5条西7丁目）

（会費）6,000円

（人数）約150名

申し込み方法：下記郵便局口座に研究集会のみ参加の方は6,000円，研究集会，懇親会参加の方は12,000円を振込後，別紙申込用紙にご記入の上，振込控えのコピーを貼付して事務局宛にFaxでお申し込み下さい。ご入金を確認後，研究集会参加証，懇親会参加証を送付いたします。

口座番号：00120 0 538092

口座名義：地下水・土壌研究集会

申し込み・問い合わせ先：

第7回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会事務局

〒108 0014 東京都港区芝4 4 5三田 KM ビル 5階

(社)土壌環境センター 保賀，岡田
Tel : 03 3452 2593 , Fax : 03 3452 2832
E-mail : syuukai@gepc.or.jp

北海道大学低温科学研究所 寒冷海洋圏部門助手公募

1. 公募人員：助手1名
2. 所属：低温科学研究所寒冷海洋圏部門
3. 研究内容：大気中の有機化合物の起源および変質過程を化学的手法（観測および実験）により研究する方を希望します。当研究所は寒冷圏および低温条件下における科学現象の基礎と応用の研究を目的とする全国共同利用の研究所であり，その中で当該部門は寒冷海洋域が地球全体の気候システムにおいて果たしている役割の研究を中心課題としています。当研究所の化学関係のスタッフとしては，海洋環境グループに河村公隆（教授）及び中塚武（助教授）が在籍しています。詳細は低温科学研究所のホームページの組織，研究者一覧を参照して下さい（<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/home.html>）。着任後は，大学院地球環境科学研究科・大気海洋圏環境科学専攻の研究指導（補助）を担当していただく予定です。
4. 応募資格：博士の学位を有する者又はそれに準ずる能力があると認められる者
5. 着任時期：決定後なるべく早い時期
6. 提出書類：
 - (1) 履歴書（連絡先，大学入学以降の学歴，研究・教育歴，学位，受賞歴など）
 - (2) 主な研究歴
 - (3) 研究業績リスト
 - (4) 主要論文別刷り5編以内（研究業績リストに印）
 - (5) これまでの研究概要（2,000字程度）
 - (6) これからの研究展望（2,000字程度）
 - (7) 応募者についての意見を聞ける人2名の氏名と連絡先
7. 公募締切：平成12年10月2日(月) 必着
8. 書類提出先：

〒060 0819 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所長 本堂武夫
9. 問い合わせ先：

北海道大学低温科学研究所 教授 河村公隆
Tel : 011 706 5457 , Fax : 011 706 7142

10. その他：封筒の表に「寒冷海洋圏科学部門助手応募書類」と朱書きし、書留でお送り下さい。

大阪市立大学理学部地球学教室 教員公募について

表記公募の案内が参りましたのでお知らせいたします。

記

1. 採用職名・人員：教授 1名
2. 資格：博士の学位を有し、大学院博士課程での研究指導ができる方
3. 募集分野：地球物質学（岩石学）分野
島弧・海溝系における諸現象（火成作用・変成作用など）を野外調査に重点をおき、岩体・岩石レベルで研究し、その一般的発達過程の考察をめざす人。教育面では岩石学・岩石学実習・変成地質学・火成地質学・地球学演習・地質調査法および同実習・野外実習・地球学実験などの研究領域に關係の深い学部・大学院の専門科目および全学共通科目の一部を担当できる人。
4. 必要書類
 - (1) 履歴書
 - (2) 論文・著書のリストおよび最近5年間の学会発表リスト
 - (3) 論文の別刷りあるいはコピー
 - (4) 研究・教育に関するこれまでの経過と今後の抱負（2,000字以内）
 - (5) 推薦状を添付してもよい
 - (6) 本人の照会可能な人（2名まで）の名前・所属・連絡先を添付してもよい
5. 締切：平成12年10月16日（必着）
6. 採用予定：平成13年4月1日の予定
7. 宛先：
〒558 8585 大阪市住吉区杉本3 3 138
大阪市立大学理学部地球学教室
教室主任 熊井久雄 宛
（注）封筒の表に「応募書類在中」の旨を表記し、「書留」で郵送のこと。
8. 選考方法：当教室所定の手続により、地球学教室教室会議が選考し、理学部人事審査委員会で審査し、理学部教授会で決定します。
9. 結果：平成13年1月下旬に本人のみ通知します。他の方々には応募書類を返却します。
10. 問い合わせ：Tel 06 6605 2589（教室主任）

書評

「レオロジーと地球科学」
（唐戸俊一郎著，東京大学出版会，¥3,800）

1970年代にプレートテクトニクス理論が確立し、地表付近の物質の運動と移動については、概略が説明できるようになった。地球科学に携わる研究者の興味は、地球のもっと深部における物質の運動・移動へと移っていった。この本には、プレートテクトニクス理論確立後、1980年代から現在に至るその後の展開が、主として地球物理学の立場から興味深く描かれている。特に、固体地球内に存在する水が地球の内部の物性を大きく支配しており、太陽系の中で地球をユニークなものとしているということが繰り返し書かれていることが印象深かった。

地球深部の新たな情報をもたらしたのは、主として、地震トモグラフィーなどに代表される高精度地震学と技術的發展に目を見張るもののある高温高压下での実験鉱物学である。これに惑星探査機によってもたらされた他の地球型惑星の構造とテクトニクスに関する知見を加えられている。この同じ期間に、地球化学の立場からも地球深部に対する多くの情報が得られているのだが、地球化学の進展については最小限の記述にとどまっている。

(1)地球の層構造と構成物質 (2)プレートの形成：部分熔融と水の役割 (3)地震波トモグラフィーとマントル対流 (4)マントルの物質循環とレオロジー (5)深発地震の発生メカニズム (6)核のダイナミクス (7)比較惑星学と惑星物質のレオロジーの7つの章からなる。ミクロの物質科学とマクロの地球科学を有機的に解説し、現在めざましく発展している境界領域科学としての地球ダイナミクスのおもしろさを知ってもらいたいという著者の願いから、この分野の勉強・研究に必要な技術的な記述は本文と分けて付録にまとめ、あまり細かなことに捕らわれずに大筋が追えるように工夫されている。

この分野に関する私のまとまった知識はBrown and Mussett 著“The Inaccessible Earth”という教科書（この教科書は地球物理、地球科学、実験鉱物学、元素合成理論などを総合した良い教科書であったが、出版社の倒産で絶版になった）に基づくものであって、1980年代末くらいまでの知見である。今回読んだ本は、Brown and Mussettの書き終えたあとの

この分野の発展をカバーしており、私にとっては読んで楽しい本であった。

ただ、読んで楽しむためにはある程度の基礎知識が必要ということはいえそうで、地球物理学の基礎のない学生には少し難しいかも知れない。

ところどころに、リングウッドなど著者が接した著名な研究者のプロフィールがコラムとして載っており、これも楽しかった。

齋藤和男（山形大学地球環境学科 教授）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いいたします。次号の発行は2000年11月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は10月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

中井俊一

〒113 0032 東京都文京区弥生1 1 1

東京大学地震研究所

Tel : 03 5841 5698 , Fax : 03 5802 3391 ,

E-mail : snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

鍵 裕之

〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1

東京大学大学院理学系研究科附属地殻化学実験施設

地球惑星科学関連学会 連絡会ニュース

No. 20

(2000年8月)

記事:

- ・2000年合同大会を終えて
2000年合同大会九州大学 LOC
- ・2001年合同大会のお知らせ
地球惑星科学合同大会運営機構
- ・地球惑星科学関連学会拡大連絡会議事録(案)

2000年合同大会を終えて

大会委員長:柳 喙, 実行委員長:湯元清文, 委員長補佐:
竹広真一, 企画委員長:島田允堯, 企画委員:山内敬明, 並
木則行, 広報委員長:鈴木貞臣, 広報委員:川瀬 博, 松島
健, 印刷物担当:中村 智樹, 北島 富美雄, プログラム委員
長:村江達士, プログラム委員:石橋純一郎, 竹中博士, 佐
野弘好, 松井正典, 高岡宣雄, 伊藤久徳, 清水 洋, 河野英
昭, 情報化委員長:関谷 実, 情報化委員:吉岡祥一, 三好
勉信, 中島健介, 経理委員長:中田正夫, 経理委員:池田 剛,
大会幹事長:飯島 健, 受付担当:佐野弘好, 宿泊担当:竹
中博士, 亀 伸樹, 会場担当:石橋純一郎, ポスター担当:
山内敬明, アルバイト担当:守田 治, 保育室担当:並木則
行, 企業展示担当: 松島 健, 機材担当:宮本知治

1. 総括

北大 LOC の 1999 年合同大会は業者に一部委託し, 電子化を進め
る事によって LOC の負担が軽減できないかをさぐる”試験大会”
であった。その為のプログラム開発費などに連絡会の剰余金が投
資され, 2000 年大会はこの 1999 年大会の経験と投資を最大限に
活かし, さらに, 2001 年度以降に繋げられる可能性も探る大会で
もあとと位置付けられた。1999 年大会の運営方針を基本的には踏
襲し, さらに, 改善のために各参加学会の会員の皆様に多大な負
担をお掛けすることになった。2000 年合同大会は以下の基本方針で
実行された。

(1) 1999 年は, 事前登録: 一般¥5000, 学生¥2000; 当日登録:
一般¥8000, 学生¥5000 であったが 2000 年大会では, それぞれ
¥1000 ずつ値上げした。

(2) JCOM には 1999 年度並の作業と 2000 年度のセッション募
集・編集の開発を含めた作業をお願いした。これにより, プログ
ラム編集委員会の作業と旅費の削減をはかった。

(3) スライド, OHP 等の学会発表に最低必要な設備は取り込む
が, 無駄な会場, 機材などの使用の見直し検討を行った。

(4) 受益者負担の原則で印刷物, CD-ROM 等は登録者・希望者
のみ配布・販売した。また, この案内経費や, 研究打ち合わせ会
議, 企業展示などにかかる経費は受益者から徴収した。

(5) 2001 年以降に繋げるための WWW の維持, 管理, 開発費等
については, (1)~(4)により 200 万円以下の会計赤字になるよう努
力し, 各学会の理解を得た。

各参加学会から登録者, JCOM, 大会会場関係者, 合同大会連絡
会等の皆様のお陰を持ちまして, (1)新たなプログラム編成シ
ステムを導入し, 2001 年度合同大会に繋げることができた。また,
九大 LOC の献身的な努力と JCOM の人的・金銭的なご協力により
(2)+194 万円あまりの黒字を次年度に引き継ぐことができた。
以上のことから, 2000 年大会は大成功であったと自負(総括)し
ている。

2. 企画委員会報告

(1) 青少年セミナー

6月25日(日)18:00~20:00 C102

次世代を担う中高校生・一般の方々を対象にした講演で, 第1
線の研究者に, 世界に誇るすばる望遠鏡として恐竜の絶滅の謎に
ついて最新の情報を分かりやすく解説していただいた。

- 「すばる望遠鏡が切り拓く宇宙 — 新しい太陽系・惑星像を
もとめて—」

渡部 潤一 (国立天文台助教)

- 「恐竜の絶滅と隕石衝突」

平野 弘道 (早稲田大学教授)・会場

(2) フューチャーセミナー

6月27日(火)14:00~16:00 IC

火山噴火予知に関する研究及びGPSによる測地学・災害科学的
研究は, 地球惑星科学諸分野の中で今後新たな展開が大きいと期待
されている分野であるので, 現在第一線で研究を進めておられる
お二人の方に, 現状と今後の展望を語っていただいた。講演を予
定されていた宇都浩三氏は, 三宅島噴火活動化のため現地に行か
れ, 代わりに篠原宏志氏による講演がなされた。

- 「火山をより良く知るために: 雲仙火山科学掘削計画」

篠原 宏志 (地質調査所)

- 「GPS for Remote-Sensing: New Ways of Studying the Earth and
Monitoring Natural Hazards.」

Oscar L. Colombo (USRA/NASA Goddard Space Flight
Center)

3. 広報委員会報告

青少年セミナーの企画を科学雑誌「ニュートン」編集者に広報を依頼し、雑誌のHPに掲載してくれた。また、青少年セミナー案内のA4版カラーパンフを200枚作成し、案内の手紙をLoc1999 宇井委員より引き継いだ(日本地学教育学会会員)名簿の東京・埼玉・千葉・神奈川の中高校教諭約160人と報道関係約20人に郵送した。セミナー出席者は約60名であった。

取材記者向けに取材方法の指示を書いた文書を作成し、受付で配布した。会期中に受付した取材は、毎日新聞、地人書館、岩波書店、NHKエンタープライズ、岩手日報社、共同通信、読売新聞、毎日日報の8社の10名であった。

今後の課題として、1) 青少年セミナーに対して、高校の先生から「開催時刻を早めるべき」との指摘がなされた。2) 科学雑誌に事前の紹介を依頼し、東京周辺の中・高校の地学教員への周知も行ったが、学会員以外の聴衆が少ないので、今後は開催方式の検討が必要である。3) 大会のポスターを作るべきであった。4) 今回は組織委員会として、報道関係者に対するトピックスを示さなかった。5) 報道関係の問い合わせもあったが、2000年3月末より北海道有珠山が噴火し、また学会期間中、三宅島の火山活動が活発になったが、学会として特別な対応はしなかった。このような突発的なイベントに対して、学会としてどのように対応すべきか、今後、事前に検討しておく必要がある。

4. プログラム委員会報告

2000年合同大会のプログラム編成方針は、基本的に1999年大会を踏襲し、学会固有セッションは設けず、全てのセッションを一律に公募とした。ただし、セッション間の調整を担当するプログラム委員を決める参考とするために、セッションの申し込み時に、そのセッションが主として関連する学会を、指定して頂いた。セッションの受け付け、個別の講演申し込みの受け付け、要旨集原稿の受け付け、参加申し込みの受け付け等、全ての作業をWEBで行った。要旨集は、1999年大会と同様に、冊子状のものには発行せず、WEB上で合同大会の参加者以外にも無料で公開した。合同大会の会期中の、WPGMが同じ場所で平行して開催され、プログラム編成に様々な影響を与えることが考えられたが、皆様のご理解とご協力により成功裏にプログラム編成を遂行することができた。

5. 情報化委員会報告

昨年度北大LOCにより開始された業者委託の電子化システムを引き継いで運用した。本年度新たにセッション登録・編成についてもWeb上で行うシステムを立ち上げた。これにより、プログラム委員の会合の必要性がほとんどなくなり、旅費や時間の節約になったはずである。Webシステムによる各種登録作業も2年目になったためか、心配していたほど苦情は来なかった。

ただし、ほとんど全ての作業をWeb上で行うようにしたために、LOCの仕事のかかなりの部分が情報化委員会に集中することになった。情報化委員の仕事を担ってくれる専属の職員がいると、かなり楽になるはずである。次年度の運営機構の構成メンバーに期待します。

6. 経理委員会会計報告

2000年合同学会はWPGMと一部同日開催となり、参加者数の現象が懸念されたが、実際は2098人が参加し赤字を出さずに黒字にすることができた。この原因として、(1)北大1999LOCの遺産を最大限に活用したこと、(2)参加登録料を一律1000円値上げしたこと、(3)参加数がそんなに減少しなかったこと、(4)プログラム編成をWEB上でおこなったこと、(5)企業展示の収入がおおきかったこと、(6)九大LOCの支出を極力抑さえ、JCOMへの追加要求した請求額も抑さえたこと等が考えられる。特に、(5)に関しては、今後も定期的な収入源とするためには、企業の要望などを組み入れて行う必要があると考えられる。

収入		
投稿料	1224件	3,258,500
参加料		
(事前)	1293件(一般:776,学生:517)	6,207,000
(当日)	783件(一般:580,学生:203)	6,438,000
参加料(学生アルバイト当日)	22件	66,000
宿泊代		3,214,290
CD-ROM販売		118,000
企業展示		940,000
諸学会会場費(含会合食事代)		306,720
保育室利用料		41,300
昼食代		152,890
学術情報センター資料提出(1999年度分)		1,754,487
諸収入		22,623
合計		22,519,810円
支出		
会場費		1,782,300
ポスター会場設営費(WPGMと折半)		554,000
ポスター会場コーヒーサービス		173,250
当日機材費用		1,402,640
(OHP、スライド、携帯電話レンタル、搬入出代、雑費)		
宿泊代(含WPGMへの支払い)		2,617,700
金券代		396,600
アルバイト代		1,418,750
プログラム印刷費		945,000
CD-ROM印刷費		1,288,000

封筒、郵便振込用紙、名札印刷費	374,600
登録関係費用（事前登録、宿泊登録）	619,000
育児サポーター	92,329
各学会会合食事代	72,000
発送費	586,800
カード手数料	166,969
ホームページ製作費用 （プログラム開発、WEB 開発、システム運用管理）	3,900,000
当日運営管理費用（含人件、宿泊、備品費：JCOM）	416,000
運営管理費、出張費、通信費、消耗品、備品（JCOM）	1,580,000
予稿集原稿登録処理費（再投稿分）	150,000
広告用ホームページ追加費用	325,000
国立情報学研究所データ処理費用	100,000
消費税（JCOM）	610,474
プログラム委員会費用	120,000
LOC 会場下見費用	398,860
講師謝金	60,000
LOC 消耗品、運搬費	131,401
LOC 事務経費（通信、コピー、会議費）	293,470
合計	20,575,143 円
決算	+1,944,667 円

7. 大会幹事会報告

合同大会開催予定日期の1年前に、青少年総合センターにて会場・宿泊の施設の仮使用申請手続を済ませた後、各担当者の哲学・思想を十分活用して然るべき準備を整えて来た結果、2000年合同大会を開催し終了する事が出来た。

・会場関係:常に事前の利用申請手続の相談を怠らぬようにして、設備の充実した国立オリンピックセンターを今後とも利用することが望ましい。講演発表者の要求希望と運営側の準備・応答の兼ね合いは課題として残る。受益者負担の精神で集会・総会会場を利用して貰った事は有意義であった。

・宿泊関係(含昼食券販売):今回はWPGMと連動開催であった故、センターでの宿泊は2本建て(合同大会へのみ参加のコース、合同大会とWPGM両方への参加のコース)で準備・回転を行った。センター内カフェテリアでの昼食券は、毎日、発表会場付近にてカフェテリアのスタッフに販売して貰うのが効果的と思われる。

・ポスター関係:WPGM側と会場(国際交流棟)、機材の調達・融通・撤収で歩調を合わせ、さらに一部の会場では使用条件(飲食のため)をクリアすべく準備を行い、469件の講演会を終了した。メイン会場と離れていることにも今後留意された。

・企業・団体展示関係:16団体が出展して3日間にかけてオープンした企業展示は、出展料・PR効果共に出展団体側にはおおむ

ね好評であったのみならず、合同大会側にとっても有力な収入源として寄与した。適切な会場選びについて調査の必要あり。

・アルバイト関係:全国からの総勢80名の学生アルバイトによるアンセルフィッシュな協力こそが、大会運営の遂行を可能にした。初日から終日まで、補助の必要性・緊急性・即応能力的な確かな判断が要求された。応募した学生側には、大会前日位まで不確定要素のあることも考慮しておくことが肝心である。

・受付関係:当日の参加登録業務(一般・学生)、報道関係への対応、事前登録への質疑、宿泊者へのチェックイン・チェックアウト業務、総合案内(講演取り消し、参加者間のメッセージ)、忘れ物取り扱いなど期間中、万相談所として機能してきた。

・保育室:合同大会側が予め借用しておいた一室を用いて託児業務が行われた。運営は、ボランティアグループ(保育室実行委員会)の責任のもとに行われた。これの継続への希望は根つよい。

2001年合同大会のお知らせ

地球惑星科学合同大会運営機構

1. 地球惑星科学合同大会運営機構について

地球惑星科学合同大会運営機構 代表 浜野洋三
地球惑星科学関連学会合同大会は、1990年の東工大に始まり、2000年の九大まで、大学LOCによって担われてきました。2001年以降の合同大会については、本年6月28日に開かれた地球惑星科学関連学会拡大連絡会において地球惑星科学合同大会運営機構の設立が認められ、同日発足しました。21世紀の最初となる2001年の合同大会からは、新しい運営体制である合同大会運営機構によって、継続的に合同大会が開催されることとなります。

合同大会運営機構の事務局は当面の間は東京大学地球惑星科学専攻内におかれますが、同専攻は大学LOCとして合同大会の開催を請け負ったわけではなく、全国の研究者等の集まりである運営機構がその実施にあたることとなります。といいましても、全国に散らばった人たちが合同大会を運営する体制が直ぐに作り上げられるわけではありません。そのため、2001年以降の合同大会を開催しながら、このような体制を作ることが当面の運営機構とその構成員の任務となります。運営機構ではこれまでの大学LOCと地球惑星科学関連学会連絡会の合同大会開催に関わる努力を引き継いで、運営する側からも参加する側からも魅力のある合同大会の実現を目標としています。このような体制をつくり、多くの意欲のある研究者が気軽に合同大会を運営できるようにするためには、常設の事務局を設けることが必須であり、その育成を行うのも当面の仕事と考えています。

地球惑星科学合同大会の継続的な開催は、地球惑星科学に関わる学会、研究者の間の情報共有の促進や、地球惑星科学としての

連帯感を生み出すために重要な役割を果たし、今後大学の法人化などの際に地球惑星科学としての一体感を持った対処を行い、また地球惑星科学に関わる巨大プロジェクトを生み出し、それに関わっていくためにも寄与すると考えられます。運営機構は合同大会開催に携わろうとする各学会や研究者にオープンな組織ですので、是非合同大会の継続に意義を見出し、その運営に関わる意欲を持った方々の参加を歓迎します。現在は2001年の準備を始めたところですが、継続的に合同大会を開催していくことが運営機構の任務ですので、多数の方々に運営機構に参加していただく事が必要なのです。

運営機構は、財務局、企画局、情報局、総務局、プログラム局と事務局で構成されています。運営機構の実態についてはホームページをご覧ください。また、この運営機構ホームページでは、運営機構のことでなく、2001年合同大会の準備状況、各学会へのリンク、地球惑星科学関連の専攻、学科、研究所へのリンク、連絡会のお知らせ、等を掲載していきます。2001年以降の各大会では、それぞれ特徴的なキャッチフレーズが残るような開催方式を考えています。これについては運営機構内では企画局を中心として考えてまいります。皆様も是非ご意見をお寄せいただくようお願いいたします（運営機構にお入りいただくことはさらに歓迎します）。これらについては、運営機構事務局メール core@jmoo.eps.s.u.tokyo.ac.jp にご連絡下さい。

2. 地球惑星科学合同大会の将来と2001年大会

企画局 木村 学

2.1. はじめに

1990年以降順調に発展してきた合同大会が2001年開催に当たって、財政、学会を支える体制において多大な困難に直面し、学会存亡の危機に陥った。この困難に陥った背景は、学会活動が財政的にも、実務の上でも研究者のボランティアによってのみ支えられていることに尽きる。多様な分野からなる研究者間の交流を通じて、日本における地球惑星科学の発展を願う研究者の要求に依拠して学会が開かれてきた。しかし、限度を超えたボランティアが本来の「研究を前進させたい」という研究者の願いと矛盾したものと直面したのである。

21世紀に持続的に発展する学会とするためにはこの点を突破し、合同大会に新しい地平をつくりうるか否かにかかっている。この間直面した困難を「毎年の大会をどう乗り切っていくかという技術的問題」としてのみ捉えるのではなく、地球惑星科学の発展と合同大会の役割、日本の地球惑星科学合同大会としての世界戦略からみた学会経営のあり方などの根本まで立ち戻り、将来展望の中で解決してこそはじめて発展の基礎が作られるのではないだろうか。

2.2. 合同大会に新しい地平を

学会の発展とは何であろうか？言うまでもなくその根幹は学会が科学のフロントを担い、それを持続することである。現在、世界最大規模の地球惑星関連の学会はAGUである。毎年100名を大きく超える日本人研究者が参加している。日本における合同大会参加経費をはるかに超える費用を要するにも関わらず、年々日本からの参加者は増えている。その理由は、この学会が世界の地球惑星科学のフロントを担っているからに他ならない。この科学のフロントを担い続けるためのAGUの学会経営は創意工夫に富み、また世界戦略としてWPGM等の企画が実行されていることは周知の事柄であろう。

世界において地球惑星科学のフロントを担う学会がAGU1つに集中することは合理的な状態なのであるか？それは合理的な側面とそうではない側面をもっているであろう。地球惑星科学の様々なフロントの世界における全貌を見渡せ、そこに携わる様々な動きを作りやすい、あるいは参画しやすいこと等は合理的な側面である。しかし、規模が大きくなりすぎたり、またアメリカに一極集中することによって他国の研究者にハンディキャップを強いることなどは非合理的な側面である。フロントはいくつかのスクールないし個人の競争によって成り立っているのが一般的である。スクールや個人が国境を超えて多様である程、様々な異なる視点によって豊かなフロントが形づくられるものであろう。近年のEGU (European Geophysical Union) の成立の背景はヨーロッパにおける地球惑星科学研究者のその様な認識を背景として理解しうるし、日本の地球惑星科学合同大会が発展し得る必然性がそこにあるように思える。このように、合同大会が発展すべき必然性のあることは理解し得たとしても、自然発生的にそうなることはない。その必然性を追い風として確実に結実させる戦略と戦術を持つかどうか鍵である。

2001年を「世界において地球惑星科学のフロントを担う学会を作っていく第一歩」と改めて位置づける必要がある。日本の地球惑星科学が人類の英知のフロントにくっきりと位置づき、未来を照らすことになる21世紀を作るために、今多くの努力が必要な時であるように思える。

合同大会の新しい体制として、運営機構を設定し、その中に、局を設けることとなった。企画局は上へのべた根本まで立ち返って将来を見通し、新たな学会の発展のための方策を検討する予定である。2001年、合同大会の新しい出発に相応しい「キャッチフレーズ」、「新しい試み」を模索中である。すばらしいアイデアをお持ちの方は是非、御意見を御寄せ頂きたい。更に出来れば企画局に加わっていただき「少しの」力を学会発展のためにおかしたいただければと願っている。

3. 2001年大会の会場について

総務局 岩上直幹

「勝手知ったる代々木の会場」という感じで、98年から堆積し

てきた皆さんの原体験と摩擦しない簡潔・明瞭な会場設定をめざします。

他団体との競合の結果、使える会場数がやや少ないのが難点です。講演会場として使えるのは120人以上10部屋半(半は水木金のみ使える160人部屋)、80人が4部屋です。2000年と比べると80人以上の部屋数では2部屋半少ないことになりましたが、会期は6月4日(月)から6月8日(金)の5日間にふえます。

ポスターセッションもこれまで通り国際交流棟に設定します。2階の第一ミーティング室(120人)を他団体に割譲されたこともあり、数は減って150面程度となりそうですが、会期は5日間とれます。

国際交流棟レセプション室は企業展示に使い、飲食物の供給も考えています。センター棟の40人部屋4と20人部屋5が集会などにつかえます。宿泊もこれまで通りビジネスホテル型・ユースホステル型両方を斡旋します。各型150名ずつ確保の予定でしたが、これも他団体への割譲のため、月曜夜のビジネスホテル型が少なめです。

4. プログラム局から

2001年度担当 阿部豊

2001年プログラム局担当(委員長)になりました阿部です。2001年にむけてよろしくお願いたします。

4.1. プログラム局の役割

運営機構の発足にともない、プログラム局が設置されましたが、プログラム局とプログラム委員会の関係は次のようなものです：

- 1) 各学会選出委員とプログラム局員でプログラム委員会を構成する
- 2) 各学会選出のプログラム委員は各学会セッションのプログラム編成を行う
- 3) プログラム局は一般公募セッションのとりまとめを行う
- 4) 全体の調整はプログラム委員会でを行うが、最終的にはプログラム局幹事会が中立的立場から責任を持って行う

つまり、学会選出のプログラム委員は学会の意見を代表してプログラム編成に関わり、プログラム局・プログラム局幹事会は学会の立場を離れて中立的に共通セッションのプログラム編成・全体調整に関わることになります。

プログラム委員はプログラム局メンバーが兼務することも可能ですが、全体調整に関わるプログラム局幹事会メンバーとは兼任できないことといたします。プログラム局幹事会はその年度と前年度、次年度のプログラム委員長に分野バランスを考えて数名の委員を加え、4～5名のメンバーで構成し、2001年度は

阿部 豊	東大・理・地惑	2001年担当
岩森 光	東大・理・地惑	2002年担当予定
小野高幸	東北大・理	
原 辰彦	建築研	

村江達士 九大・理・地惑 2000年プログラム委員長で構成する予定です。

4.2. 2001年のセッション編成に当たっての基本方針

- ・学会枠を越えた横断的なセッション
 - ・各学会の固有のアクティビティを反映するセッション
- の両者を積極的に支援する、ということで臨みたいと考えます。

1997年まではすべてのセッションは基本的に各学会選出のプログラム委員を通して提案されていましたが、1998年以降、一般公募の形を取ることによって、また電子化によってセッション提案が容易になったことによって、学会枠を越えたセッションの提案が著しく増加しています。このことは従来合同大会とは関係が薄かった分野の研究者の参加を促し、合同大会参加者の増加につながっている、という分析もなされています。地球惑星科学全体に関わる議論ができる唯一の講演会として、合同大会において学会横断的なセッションが多数開催されることは大変望ましく、この点については今後も積極的に支援していく必要があります。

一方、学会固有のセッションが公式的には廃止されたことの問題点も指摘されています。固有セッションが廃止されたと言っても、この3年間、各学会選出のプログラム委員等から一般公募のセッションと同様に提案される形で固有セッションに相当する内容のセッションは実質的には開かれていました。しかしながら、そのようなやりかたでは、必ずしもほかの学会と関係が深くない分野のセッションが開きにくい、また、毎年セッション名が変わるために、どのセッションに投稿したらよいか困る参加者がでてる、などの問題が指摘されています。これらの問題を解決する必要があります。

このための具体的な方策として、次のようにやりたいと考えています：

- ・各学会の特有の研究分野の発表の場を確保し、どのセッションに投稿したらよいか参加者が困る問題を解消するために、「レギュラーセッション」を設けます。これは従来、固有セッションと呼ばれたものに相当します。このセッションは学会から提案していただきます。従来とやや違う点は、上記の毎年セッション名が変わることの問題を解消するため、5年程度の間はセッション名を固定するつもりで提案していただく点です。(ただし、投稿数が少ないなどの問題があれば、その点については随時見直す)。また、「レギュラーセッション」は単一学会だけでなく、複数の学会が合意の元に提案することもあり得るものとします。
- ・その時々に応じてタイムリーな問題を、学会の枠にとらわれずに議論する場を設けるために、「スペシャルセッション」を設けます。これは従来、共通セッションとか、共通シンポジウムと呼ばれていたものに相当します。これは一般公募でセッション提案をしていただきます。ここ3年間に行われてきたように、学会が母胎となってセッション提案することももちろん歓迎します。突発

的な地球科学現象などに対応した時事的セッションもこの中に含まれます。

・要するに、学会活動をベースとして毎年開かれる「レギュラーセッション」、それ以外の「スペシャルセッション」を設けることとします。4.1で学会セッションと呼んでいたものは、上記の「レギュラーセッション」に相当します。

・レギュラーセッションとしては、1997年の名古屋大会での固有セッション数に準拠して40セッション前後を想定する。会期と会場数を考えるとスペシャルセッションもあわせたセッション総数は100～120前後を想定するが、パラレルセッションが増えることには問題もあるので、適正数については今後プログラム局で議論したいと考えます。

・各学会から想定されるレギュラーセッションを提案していただけ、そのセッションと相補的な形になるように、スペシャルセッションの公募を行うのが理想ですが、時間的な都合もあり、今年度はほぼ同時に公募する事になると思います。

5. 合同大会 WEB システムについて

情報局 2001 年担当責任者: 田近英一

副責任者: 宮本英昭

IT 革命の波は、いまから 3 年前の 1997 年に、合同大会にも押し寄せました。当時の寺沢情報化委員長（東大 LOC）のご尽力によって、参加登録手続き等が電子化され、1998 年大会から WEB を用いた登録手続き等が導入されたのです。このような電子化は、時代の流れをいち早く取り入れたものであっただけでなく、一方では合同大会運営の省力化という方向性を示唆するものでした。合同大会は年々その規模が拡大しており、大学の研究者のボランティアだけで運営を支えることが難しくなっています。そこで、1998 年に大会運営を引き継いだ北大 LOC はこの考え方をさらに進め、合同大会運営全般をできる限り統合したシステムの開発を業者に委託することによって大会運営の省力化をはかるとともに、実行組織が交代しても大会運営が自動的に伝承され得るものにするという、大胆な構造改革に着手しました。業者委託によって開発された WEB を用いた予稿集原稿登録システム等は、1999 年大会から運用が開始されました。このシステムは九大 LOC に引き継がれ、セッション登録システムの新規開発やシステムの改良が行われ、2000 年大会でも運用されました。

今年度も、昨年度に引き続いて、同じ WEB システムの運用を予定しております。参加者の皆様の中には、現在のシステムは登録手続きが煩雑である等のご不満をお持ちの方がいらっしゃるかも知れません。しかし、2000-3000 人規模の合同大会を運営していく上で、このような電子化による大会運営の省力化は不可欠なものであり、また、電子化に伴ってある程度の煩雑さが生じることも避けられません。この点に関しまして、皆様のご理解をいただきたいと思ひます。

今年度の基本方針は、新たなシステム開発コストをかけずに、これまで 2 年間かけて開発されてきたシステムの安定運用をめざすことです。現在のシステムには、たとえば講演要旨に図を含めることができないなど、改善の余地が多々あります。しかし、そのような新機能の開発は、主として財政上の理由により、今年度は行いません。そのような開発は、来年度以降に計画しておりますので、どうかご了承ください。その代わりに、今年度は、現在のシステムの完成度を高めるとともに、使い勝手をできる限り改善していく予定です。

一方、今年度から、合同大会運営機構事務局が設立され、専任の事務局員が合同大会運営を担っていくことになっております。最近では、電子化に伴う必然的結果として、合同大会運営の多くの仕事が情報部門に集中してきております。研究者の負担を大幅に減らすためには、こうした仕事の大部分を事務局に引き継ぐことが不可欠です。連絡会において昨年からの集中的に議論されてきたのは、まさにこの問題でありました。したがって、情報局では合同大会運営機構事務局の育成にも力を入れていくつもりです。

さて、2001 年合同大会は、セッション募集(9 月)、予稿集原稿登録等(1-2 月)、プログラム編成(3 月)など、おおむね昨年度通りのスケジュールで、昨年同様の WEB システムを用いて行われる予定です（詳細はまだ未定です。予定が決まり次第、WEB 上でアナウンス致しますのでご注意ください）。2001 年大会ホームページの URL は、

<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2001/>

です。これまで通り、ここにはアナウンス等が掲載されるほか、各種登録手続きもこのページから行うこととなりますので、どうぞよろしくお願い致します。各種登録には、セキュリティに配慮して SSL という暗号化システムが用いられております。したがって、登録にあたっては、SSL に対応したシステムをお使いいただけますようお願いいたします（現在ご利用のシステムで SSL が使用できるかどうかは、上記ホームページ中の登録方法に関するページでご確認できます）。また、これまでと同様、個人情報登録システムを運用しますので、初めて参加される方は最初に個人登録をお願いします。すでに個人登録されている方は、そのまま継続利用できます（個人 ID 番号やパスワードを忘れた方は、ホームページ上から問い合わせを行って下さい）。

また、今年度から新たに合同大会運営機構のホームページを立ち上げました。URL は、

<http://www.jm.eps.s.u-tokyo.ac.jp/>

です。このページには、合同大会運営機構からのアナウンスだけでなく、広く地球惑星科学に関連した情報を提供していきたいと考えていますので、どうぞご覧下さい。

地球惑星科学関連学会拡大連絡会議事録（案）

日時 6月28日 16:30-18:00

場所 国立オリンピック記念青少年総合センター、センター棟
416室

出席者：

阿部豊（東大理：惑星科学会対外政策委員長、運営機構準備会）

新井正（立正大：陸水学）

有馬眞（横浜国立大：岩鉱学会会長代理、行事幹事）

飯島健（九大、九大LOC大会幹事長、SGEPSS）

伊藤谷生（千葉大理：地質学会連絡会委員）

今井亮（東大：資源地質）

入倉孝次郎（京大防災研：地震学会会長）

岩森光（東大理：火山学会連絡会委員）

大谷栄治（岩鉱学会連絡会委員・連絡会会長）

大村善治（京大：SGEPSS 総務委員）

小野高幸（東北大：SGEPSS 運営委員、運営機構準備会）

加藤照之（東大地震研：幹事会オブザーバー）

梶原良道（筑波大：資源地質学会会長）

金田博彰（東大工：資源地質学会常務委員長）

木村学（東大理、運営機構準備会）

黒石裕樹（国土地理院：測地学会連絡会委員）

小菅正裕（弘前大理工：地震、前大会・企画委員長）

鷺谷威（国土地理院：地震、大会・企画委員長）

篠原雅尚（東大地震研：地震学会連絡会委員）

鈴木毅彦（都立大理：第四紀学会連絡会委員）

鈴木裕一（立正大：水文科学会連絡会委員）

瀬川爾朗（東海大海洋：測地学会会長）

関谷実（九大LOC、情報化委員長）

武村雅之（鹿島小堀研：地震学会理事、将来検討委員長）

田近英一（東大理：惑星科学会連絡会委員）

千葉とき子（国立科博：火山学会会長）

土山明（阪大理：鉱物学会連絡会委員）

綱川秀夫（東工大理、SGEPSS 連絡会委員、連絡会幹事会庶務幹事）

坪井誠司（横浜市大：地震学会、連絡会幹事会オブザーバー）

寺島泰（京大工：地下水学会）

中田正夫（九大LOC、経理委員長）

浜野洋三（東大理：運営機構準備会代表）

林祥介（北大LOC：連絡会幹事会オブザーバー）

原辰彦（建築研：地震学会・幹事会ニュースレター担当幹事）

松浦充宏（東大理：運営機構準備会）

松久幸敬（地調：日本地球化学会会長）

松本紘（京大：地球電磁気・惑星圏学会（SGEPSS）会長）

宮本英昭（東大工、惑星科学会、運営機構準備会）

村江達士（九大LOC、2000年合同大会プログラム委員長）

森下祐一（地調：資源地質学会、連絡会委員）

安原正也（地調：水文科学会）

柳 哮（九大LOC：2000年合同大会委員長）

山本哲生（名大理：惑星科学会会長）

湯元清文（九大LOC、2000年合同大会実行委員長）

吉田次郎（東水大：海洋学会連絡会委員）

吉田尚弘（東工大総合理工：地球化学会連絡会委員）

吉田武義（東北大：岩鉱学会、連絡会幹事会渉外担当幹事）

渡辺誠一郎（名大理：惑星科学会運営委員、財務委員長）

以上48名

議事

1. 連絡会と合同大会参加学会から九大LOCに対して謝辞が表された。

2. 柳九大LOC会長挨拶

3. 前回議事録の確認が行われ承認された。

4. SGEPSSはこれまで合同大会に対する態度を保留していたが、総会において2001年の合同大会にセッション参加することが決定された旨、綱川SGEPSS連絡会委員より報告された。

5. 2000年合同大会報告（九大LOC）

企画担当（島田）：セミナーは土日昼間の方が良い。宣伝が必要である。企業展示はうまくいった。

経理担当（中田）：2020人が参加登録した。赤字を出さずに済みそうである。これは下見が一回で済んだこと、企業展示の収入が大きかったこと、1000円値上げしたことなどの効果があった。

プログラム担当（村井）：セッション公募からWEBで行った。

プログラム委員は各学会より2名ずつ推薦してもらった。ソフトを工夫してうまくいった。今回は、セッション件数を制限し、60コマ（通常は80コマ）に抑えた。

情報化担当（関谷）：セッション登録からWEBを使用した。

会長（柳）：2001年合同大会の総括を行った。

6. 磯島（JCOM）：合同大会のWebシステムの現状に関する説明と2001年の保守・開発に関する提案があった。過去2年間の開発で基本的には完成したので、2001年はマニュアル、FAQなどの充実を図り、使い易さの向上を図る考えであることが説明された。これに対して、システムを使う際の専門知識の必

要性の有無について質問があり、特別な知識は必要ないことが説明された。また、見積に関する質問があり、その内訳について説明された。

7. 合同大会東大案の概要と運営機構・メンバー・運営方針について

大谷連絡会会長より、4/20の連絡会合以降の準備会での議論についての経緯が説明された。その中でSGEPSSが、前回の連絡会合では保留していた合同大会の運営に対する受益者負担などの原則と東大から提案されていた運営機構案を認め、準備会に3名の委員を送ることになった旨が紹介された。

引き続き東大の浜野運営機構準備会代表から準備会で議論された運営機構の概要が説明された。運営機構は事務局を東大におくこと、そして数年で自立的に合同大会を運営できる非研究者事務局長を責任を持って養成することなどの方針が浜野氏より提案された。以上の運営機構についての原案に対して、松本SGEPSS会長から支持が表明された。また地震学会からも運営機構に学会員を送る考えであることが入倉地震学会会長により表明された。地下水学会の寺島連絡会委員から、学会の「合同」としての意味が薄れるのではないかと質問が出された。これに対して、これまでの大学LOCと比べて、より直接的に学会が運営に参加できるようになるとの説明が浜野氏からなされた。北大LOCの林幹事会オブザーバーから資料3に基づいて今回提案された運営機構案と合同大会の運営方法に関するコメントがなされた。

運営機構のメンバーとこれにより組織される合同大会実行委員会を承認するのは各学会であり、最終的には拡大連絡会でオンライン化されることが確認された。また同大会のプログラム編成のうち、学会の固有セッションについては学会が選んだプログラム委員が編成を担当することが確認された。以上の質疑応答の後、東大より提案された合同大会運営機構案は、全会一致で拡大連絡会（合同大会参加学会長懇談会）において承認された。これにより、合同大会運営機構が組織されることになった。また、2001年以降の合同大会はこの運営機構により運営されることとなった。

8. 2001年合同大会の運営方式について

2001年の合同大会について、浜野氏より詳細な原案の説明がなされた。概要は以下のようである。

- ・会場：これまでと同じ国立オリンピック記念青少年センターで行う。16会場を確保。
- ・期日：6月4日から8日まで（日曜の夜から開始）
- ・予算規模：総額を2400万円程度とする。この予算は事務局経費600万円を除けば今年の九大による大会と同じ予算規模である。
- ・拡大連絡会に引き続いて、九大LOCから運営機構への引継ぎ

を行う。

以上の原案にたいして、瀬川測地学会会長から参加費に関する質問が出され、浜野氏より値上げしても払いやすくするための様々な工夫を検討するとの説明があった。以上の原案にもとづいて合同大会運営機構が2001年の合同大会を運営することが全会一致で承認された。

9. 合同大会の決算が赤字になった場合の処置について

坪井幹事会オブザーバーより赤字の補填方法についての提案があった。それによると、合同大会の決算が赤字になった場合は、まず、連絡会がストックしている、これまでの合同大会の開催で生じた黒字分の繰り越し金を用いて補填する。それで足りない場合は、各学会がセッション数に比例して応分の負担をする、共通セッションについては関係する学会が分担して負担するという原案が提案され、この原案通り承認された。

10. 次期連絡会幹事の選出

次期連絡会幹事会の構成について議論し、大谷連絡会会長から、これまで会長を引き受けていないセッション参加学会に次期会長をお願いすることが提案された。議論の結果、以下の方々に次期の幹事をお願いすることとなった。

会長：伊藤谷生（地質学会）、ニューズレター担当幹事、原辰彦（地震学会）；会計幹事、鈴木毅彦（第四紀学会）；庶務幹事および渉外幹事、岩森光（火山学会）と篠原雅尚（地震学会）の両氏が協力して担当する；メイリングリスト担当幹事、加藤輝之（測地学会）。

11. 次回連絡会合の日程

9月19日（火曜）13:00より、東工大（大岡山）石川台2号館（地球惑星）318号室で行う。

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース 第20号
2000年8月16日発行

発行：地球惑星科学関連学会連絡会
連絡会幹事会会長 伊藤谷生

編集：地球惑星科学関連学会連絡会
連絡会幹事会ニューズレター担当 原辰彦